

北陸新幹線関係発掘調査報告書XXIV

須沢角地遺跡Ⅱ

2014

新潟県教育委員会

公益財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

# 北陸新幹線関係発掘調査報告書 XXIV

## 須沢角地遺跡Ⅱ

2014

新潟県教育委員会

公益財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

## 序

北陸新幹線は、上信越・北陸地方を経由して東京都から大阪市を結ぶ計画の整備新幹線です。東京駅から高崎駅までは東北・上越新幹線と共用し、高崎駅から長野駅までは1997（平成9）年に部分開業しています。現在、長野駅－上越妙高駅－富山駅－金沢駅－白山総合車両所間が建設中であり、2015年3月14日の開業が予定されています。

これにより北陸地方と首都圏は短時間で結ばれ、日本海沿岸地域の産業・経済・文化の交流発展に多大な効果をもたらすものと期待されています。

本書は北陸新幹線工事に伴う市道取付けに先立ち2014年度に実施した須沢角地遺跡の発掘調査報告書です。須沢角地遺跡は、過去の発掘調査により、糸魚川地域の最大規模の古代集落と位置づけられています。調査面積が狭いものの、その集落の一部を調査しました。また、発掘調査で得られた土器と遺跡近くに存在した西角地古窯跡出土の土器を分析した結果、同窯産の土器が多く使用されていることが判明しました。

これらの発掘調査で得られた成果や本報告書が、糸魚川地域の歴史資料として広く活用され、埋蔵文化財の理解や認識を深めるものとなれば幸いです。

最後にこの発掘調査で多大な御協力と御理解をいただいた糸魚川市教育委員会並びに地元の方々、また発掘調査から本書の作成まで、格別な御配慮をいただいた独立行政法人鉄道建設・運輸施設支援機構北陸新幹線第二建設局、同糸魚川鉄道建設所に対して、厚くお礼を申し上げます。

2014（平成26）年12月

新潟県教育委員会

教育長 高井盛雄

## 例 言

- 1 本書は、新潟県糸魚川市須沢字大坪 2,672 番 2 ほかにある須沢角地遺跡の発掘調査記録である。
- 2 この調査は北陸新幹線の建設に伴い、独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構（以下、鉄道・運輸機構）から新潟県教育委員会（以下、県教委）が受託したもので、調査主体である県教委は公益財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（以下、埋文事業団）に調査を依頼した。
- 3 埋文事業団は掘削作業等を小柳建設株式会社に委託して、2014（平成 26）年度に発掘調査を実施した。
- 4 出土遺物及び調査・整理作業に係る各種資料（含観察データ）は、一括して県教委が保管している。データの有無や閲覧希望は、県教委に問い合わせ願いたい。
- 5 遺物の注記は、須沢角地遺跡の略記号「14 スザワ」にそれぞれ出土地点、遺構名、層位等を続けて記した。
- 6 本書の図中で示す方位は、すべて真北である。
- 7 掲載遺物の番号は、遺跡ごとに種別に関わらず、すべて通し番号とした。本文及び観察表、図面図版、写真図版の番号は、すべて一致している。
- 8 本文中の注は第Ⅵ章を除いて脚注とし、頁ごとに番号を付けた。また、引用文献は、著者及び発行年（西暦）を文中に〔 〕で示し、巻末に一括して掲載した。
- 9 自然科学分野にかかる分析は、下記の機関に委託した。  
須臾器の胎土分析……ハリノ・サーヴェイ株式会社
- 10 各種図版の作成・編集に関しては、有限会社不二出版に委託し、完成データを印刷業者に入稿して印刷した。
- 11 本書の執筆は、第Ⅱ・Ⅵ章を除き高橋保雄（埋文事業団調査課 班長）が当たり、編集は高橋が担当した。執筆分担は以下のとおりである。なお、第Ⅱ章は、新潟県埋蔵文化財調査報告書第 225 集 須沢角地遺跡 [加藤 2011] をほぼそのまま引用した。  
高橋保雄：第Ⅰ・Ⅲ～Ⅴ・Ⅶ章  
ハリノ・サーヴェイ株式会社：第Ⅵ章
- 12 発掘調査から本書の作成に至るまで、下記の方々及び機関から多くの御教示・御協力を賜った。ここに記して厚くお礼申し上げる。（敬称略 五十音順）  
木島 勉 山岸洋一 糸魚川市須沢自治会 糸魚川市教育委員会

# 目 次

第I章 序 説	1
1 調査に至る経緯	1
2 須沢角地遺跡における過去の発掘調査の履歴	2
3 本発掘調査	3
A 調査の体制	3
B 調査の経過	4
4 整理作業	5
A 整理作業の体制	5
B 整理作業の経過	5
第II章 遺跡の位置と環境	6
1 地理的環境	6
2 歴史的環境	7
第III章 調査の概要	11
1 グリッドと調査区の設定	11
2 旧地形と遺跡の立地	11
3 基本層序	12
第IV章 遺 構	14
1 概 要	14
2 記述方法	14
3 遺構各説	14
A 古代の遺構	14
B 中世の遺構	15
第V章 遺 物	16
1 概 要	16
2 記述方法	16
3 遺物各説	17
A 古代の土器	17
B 中世の土器・陶器	19
C 土製品	20
D 鉄製品	20
E 石器	20
F 西角地古窯跡出土須恵器	20

第VI章 自然科学分析	22
1 須沢角地遺跡出土須恵器の胎土分析	22
A はじめに	22
B 試料	22
C 分析方法	23
D 結果	25
E 考察	28
F さいごに	29

第VII章 まとめ	30
1 遺構・遺物から見た本調査区の位置づけ	30
A 古代	30
B 中世	31
《要約》	31
《引用・参考文献》	32
《観察表》	34
土器・陶器	34
土製品	36
鉄製品	36
石器	36

## 挿図目次

第1図 北陸新幹線の路線と調査遺跡の位置	1	第6図 須沢角地遺跡周辺の主な遺跡	9
第2図 旧青海町教委による発掘調査の遺構配置図	2	第7図 須沢角地遺跡における土層柱状図	13
第3図 糸魚川市教委による発掘調査の遺構配置図	3	第8図 遺構の平面形態と断面形態の分類	14
第4図 須沢角地遺跡の位置と周辺の地形区分	7	第9図 胎土化学組成散布図（西角地古窯跡）	26
第5図 須沢角地遺跡周辺の地形と遺跡	8	第10図 胎土化学組成散布図（須沢角地遺跡・西角地古窯跡）	26

## 挿表目次

第1表 整理作業工程表	5	第6表 ガラスビード作成条件	24
第2表 ビット観察表	15	第7表 蛍光X線装置条件	24
第3表 性格不明遺構観察表	15	第8表 蛍光X線定量測定条件	24
第4表 須沢角地遺跡の層別器種構成比率	16	第9表 蛍光X線分析結果	25
第5表 分析試料一覧	23		

## 図版目次

### 【図面図版】

- 図版 1 遺跡範囲と発掘調査の履歴  
図版 2 グリッド設定図・旧青海町教委及び  
糸魚川市教委調査区との位置関係図・  
裸層検出標高の等高線図  
図版 3 遺構全体図・グリッド設定図  
図版 4 調査区平面図 1  
図版 5 北壁・東壁土層断面図、遺構個別図 1  
図版 6 調査区平面図 2、遺構個別図 2  
図版 7 遺物実測図 1 古代の土器 1 須恵器  
図版 8 遺物実測図 2 古代の土器 2 須恵器・  
土師器  
図版 9 遺物実測図 3 中世の土器・陶器 珠洲焼・  
瀬戸美濃焼 土製品 金属製品 石器  
図版 10 遺物実測図 4 西角地古窯跡出土須恵器

### 【写真図版】

- 図版 11 須沢角地遺跡周辺の空中写真  
図版 12 遺跡遠景・調査区全景  
図版 13 調査区近景・基本層序・調査区全景  
図版 14 ビット 1  
図版 15 ビット 2  
図版 16 ビット 3・性格不明遺構 1  
図版 17 性格不明遺構 2・土坑・遺物出土状況・  
作業風景・現地説明会  
図版 18 古代の土器 1 須恵器  
図版 19 古代の土器 2 須恵器・土師器  
中世の土器 珠洲焼  
図版 20 中世の陶器 瀬戸美濃焼 土製品 金属製品  
石器 西角地古窯跡出土須恵器

# 第I章 序 説

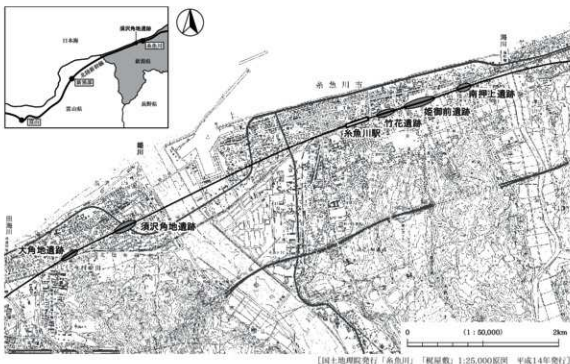
## 1 調査に至る経緯

北陸新幹線は、全国新幹線鉄道整備法に基づき建設される新幹線鉄道である。東京駅から高崎駅間は東北・上越新幹線と共用し、高崎駅から長野市・上越市・糸魚川市・富山市・金沢市・福井市等の主要都市を經由し、大阪市に至る路線である。このうち、高崎・長野間は、1997（平成9）年10月から営業運転している。長野・金沢間は、2015年3月14日に開業が予定されている。これにより、北陸地方と首都圏を短時間で結び、沿線地域の産業・経済・文化の交流発展にも多大な効果をもたらすものと期待されている。

上越市から富山市までの約110kmの区間は、1993（平成5）年9月に糸魚川市～魚津市間が新幹線鉄道規格路線としての工事実施計画が認可され、2001年4月には上越～糸魚川間の新規着工及びフル規格が決定された。これに伴う建設用地内の埋蔵文化財の取り扱い、鉄道・運輸機構と県教委の間で協議された。

須沢角地遺跡は、2001年10月の分布調査、2003・2005年度の試掘・確認調査を経て、2004・2007～2009年度の4か年に本発掘調査を実施した。調査報告書は2011年3月に刊行した。

一方、地元からの要望を受け、2014（平成26）年2月、鉄道・運輸機構は、2009年度に本発掘調査を実施した8区西隣の高架下に市道取付を計画した。同年3月、鉄道・運輸機構は、県教委に発掘調査を依頼した。依頼を受けた県教委は同月、埋文事業団に埋蔵文化財調査を委託した（教文1581号の2）。



第1図 北陸新幹線の路線と調査遺跡の位置



埋文事業団は、4月15日から6月3日まで発掘調査を実施した。

## 2 須沢角地遺跡における過去の発掘調査の履歴

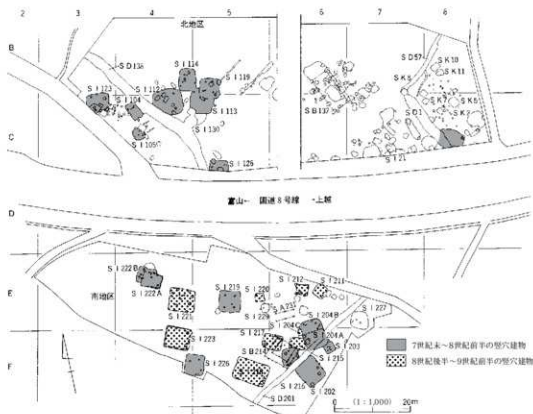
遺跡は1973（昭和48）年に県教委が行った分布調査で周知化され、その後、1986年以降の開発に伴う試掘・確認調査や本発掘調査がたびたび実施されてきた。本発掘調査は今回で7回を数える。

### 旧青海町教委の調査

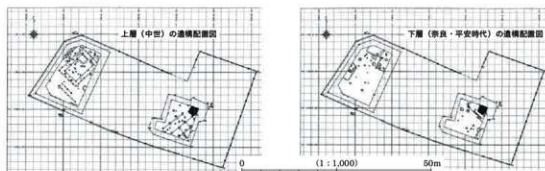
1987年5月～7月、同年9月～11月、住宅建設のための土地区画整理事業に伴い面積4,500m<sup>2</sup>を発掘調査した。調査の結果、奈良・平安時代の竪穴住居を北地区で11棟、南地区で20棟、合わせて31棟を検出した（第2図）。遺物は奈良・平安時代の土師器、須恵器が多数を占め、竪穴住居から豊富な一括遺物が出土した。時期は7世紀末～9世紀前半が主体で、当地域の古代集落と土器の様相が明らかとなった。また、鉄製鋤先、瓦経や風字碇が出土したほか、本遺跡の西500mに存在する西角地古窯跡の製品が5棟の竪穴住居で確認された。これらの遺構・遺物から糸魚川地域の大規模な古代集落とされた。中世の遺構は、掘立柱建物1棟や土坑が検出され、遺物は青磁、白磁、青花、瀬戸焼、珠洲焼が出土し、14～15世紀の所産とされた【土田<sup>1988</sup>】。

### 糸魚川市教委の調査

糸魚川市との合併後の2007（平成19）年8月～9月、店舗の構造物を設置する工事に伴い面積300m<sup>2</sup>を発掘調査した。調査箇所は1987年に発掘調査した北地区の西隣である。調査の結果、上層・下層の2面の遺構を検出した。調査面積が狭いながら下層からは奈良・平安時代の竪穴住居4棟、上層



第2図 旧青海町教委による発掘調査の遺構配置図（【土田<sup>1988</sup>】に加筆）



第3図 糸魚川市教委による発掘調査の遺構配置図〔今村・山岸2008〕に加筆

からは掘立柱建物2棟を検出した(第3図)。遺物は下層で7世紀末～9世紀後半までの土師器、須恵器が出土した。上層では青磁、白磁、珠洲焼が出土し、12世紀中葉～14世紀の所産とされた〔今村・山岸2008〕。

#### 県教委の調査

2004・2007～2009年度に北陸新幹線建設に伴い、橋脚部分を対象に発掘調査を行った。調査場所は、旧青海町教委の調査区の北西約100～400mの範囲に及んだ。調査面積は橋脚12基分で2,453m<sup>2</sup>である。調査の結果、奈良・平安時代の竪穴建物6棟、掘立柱建物8棟、畑作溝4か所などを検出した(図版3)。遺物は7世紀後葉～10世紀初頭前後まで認められたが、8世紀後葉～9世紀前半の資料が大半であった。また、焼歪みや溶着の認められる須恵器が多数見られ、西角地古窯跡を操業する集団によって築かれた集落と想定された。さらに竪穴建物には鍛冶工房と見られる遺構・遺物も確認された。中世は水田1か所を検出したが、遺物は青磁、白磁、青花、瀬戸美濃、珠洲、越前、越中瀬戸、土師質土器が散漫に出土した〔加藤2011〕。

これまでの6回の本発掘調査で7世紀後葉～10世紀、12世紀～15世紀までの糸魚川市における古代・中世の有力な集落ということが明らかになった。しかし、これまで古代北陸道の「滄海駅」の有力な候補地の一つとされてきたが、青海地域の最大の古代集落であることは確認できるが、駅が存在を裏づける資料の出土を見ていない。このため現時点では、「駅とその周辺を支えた集落」との評価が妥当とされている〔加藤2011〕。

## 3 本発掘調査

### A 調査の体制

調査期間	2014年4月15日～2014年6月3日
調査主体	新潟県教育委員会(教育長 高井盛雄)
調査	公益財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
総括	土肥 茂(事務局長)
管理	熊倉宏二(総務課長)
庶務	仲川国博(総務課班長)
調査総括	高橋 保(調査課長)
指導	田海義正(調査課担当課長代理)

調査担当 高橋保雄（調査班班長）  
支 援 小柳建設株式会社  
現場代理人 金子 彰

## B 調査の経過

本発掘調査は、2014年4月15日～6月3日まで実施した。調査依頼面積は268m<sup>2</sup>で、実質調査面積も268m<sup>2</sup>（67m<sup>2</sup>×4面）であった。以下、調査経過を抄述する。

4月8～14日 事前準備として、事務所、休憩所、機材庫、トイレ、発電機、排水ポンプ、発掘機材等を搬入した。また、調査区は歩道に面していたため安全柵や橋脚保護柵を設置した。15・16日 重機による盛土・表土の除去を行う。盛土は旧表土上に約2mほど盛られており、しかもセメントで土壌改良されていた。盛土除去後、旧表土（1層：水田耕作土）を除去した。18日 基準杭を打設し、調査範囲を確認した。21日 東壁、北壁沿いにトレンチを掘削・壁面精査を行い、基本層序を確認した。22日 II層掘削。23・24日 中世後期の遺物包含層と認識されているIII層掘削するが、遺物が少なく珠洲焼3点の出土であった。30日 IV層上面を精査し、遺構検出を行う。遺構は検出されなかった（第1面）。全景写真を撮り、地形測量をする。5月1・2日 中世前期の遺物包含層と認識されているIV層掘削する。古代の須恵器・土師器の細片は多く出土するが、珠洲焼1点のみの出土である。7日 V層上面を精査し、遺構検出を行う。遺構は検出されなかった（第2面）。地形測量をする。8日 第2面の完掘写真を撮影後、古代上層と認識されたV層を掘削する。奈良・平安時代の須恵器・土師器が多く出土し、包含層中から掘り込んでいる遺構が見え始める。VI層上面を精査した結果、11基のピットを確認した（第3面）。9日 ピットを半截し、断面写真、断面実測を行う。覆土はいずれもV層に近似することから、奈良・平安時代の遺構と判断する。12日 それぞれのピットを完掘し、個別の完掘写真を撮る。13日 全体清掃を行い、全景写真を撮る。合わせて南に約1kmの丘陵上から調査区の遠景写真を撮影する。写真撮影後、調査区の平面測量をする。14・15日 古代下層と認識されているVI層を掘削する。遺物はV層ほどではないが、奈良・平安時代の須恵器・土師器が出土した。16日 VII層上面を精査し、遺構検出を行った結果、北西側と南側に樹痕と推定される落ち込みを確認した（第4面）。20～22日 樹痕と推定される落ち込みを掘削する。覆土は砂質シルトで、上層から下層まで同質であることから短期間に埋没したものと判断する。遺物は上面付近で須恵器・土師器が少量出土したのみで皆無であった。21日 文化行政課が終了確認をし、VII層面で弱い土の濁りが見られるため、深掘りをするよう指摘される。23日 現地説明会を開催し、地元住民を中心に28名の見学者があった。27日 全体清掃、個別遺構完掘写真、全景写真、平面測量を行う。28日 VII層を約1m深掘りし、壁面精査を行う。VII層上面で確認した弱い土の濁りは、断面観察の結果、倒木痕を判断した。現地表面からすでに約3.5mを掘削しているため、礫層までは達していなかったが、崩落の危険を回避するため、発掘調査を終了した。29日 埋戻しが完了する。5月29日～6月2日 原状回復のため、撤収作業を行う。6月3日 鉄道・運輸機構の立会いの下、調査区及び借地場所を引き渡し、すべての発掘調査を終了した。

## 4 整理作業

### A 整理作業の体制

整理期間	2014年6月4日～2014年12月26日
調査主体	新潟県教育委員会（教育長 高井盛雄）
整理	公益財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
総括	土肥 茂（事務局長）
管理	熊倉宏二（総務課長）
庶務	仲川国博（総務課班長）
整理総括	高橋 保（調査課長）
指導	田海義正（調査課担当課長代理）
整理担当	高橋保雄（調査課班長）
作業	小林智恵子・畠山圭子・丸山住子（調査課嘱託員）

### B 整理作業の経過

整理作業は、現地作業の終了した翌日の6月4日から行った。遺物の整理は、現地作業と並行し、洗浄・注記を行っていたため、仕分け・接合から始めた。遺構は基礎整理を6月中に行い、平面図のデジタルデータや写真のデジタルデータの納品が終了した7月から本格的に始めた。作業工程は、第1表のとおりである。

2014年8月末に作業のあらかたは終了したが、自然科学分析委託と編集委託の終了を待って、12月に印刷・刊行した。

	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
遺物洗浄・注記	■							
遺物接合・復元		■						
遺物実測・拓本		■						
遺物トレース			■					
遺物写真撮影				■				
遺物図面図版作成			■					
遺物写真図版作成				■				
遺構図面基礎整理		■						
遺構図面図版作成			■					
遺構写真図版作成			■					
自然科学分析委託					■	■	■	■
編集・校正				■	■	■	■	■
印刷・刊行								■

第1表 整理作業工程表

## 第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

### 1 地理的環境

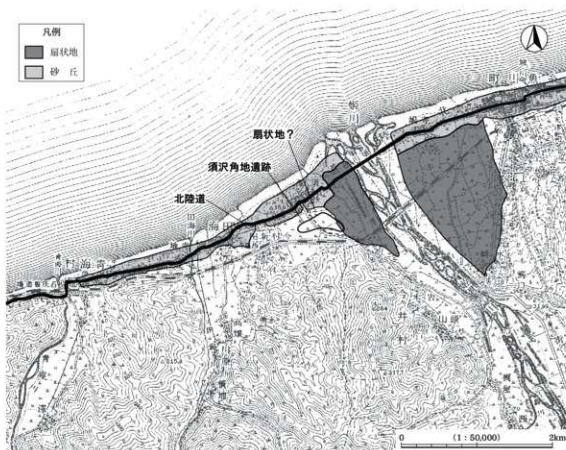
須沢角地遺跡が所在する糸魚川市は、新潟県の最西端に位置する。市域の北は日本海に面し、南を長野県、西を富山県と接する。糸魚川は、国史跡・松本街道の起点として知られている。「塩の道」とも呼ばれるこの古道は、糸魚川から長野県松本までのおよそ30里（120km）におよぶ峻険な山越えの道であり、海をもたない内陸部へ塩や魚介類を送る生命線として重要な役割を担ってきた〔土田ほか1991〕。現在も姫川沿いに長野県に通じる国道148号線・JR大糸線と、海岸線沿いの北陸自動車道・国道8号線・JR北陸本線の交点にあたる交通の要衝となっている。

糸魚川市には、ほぼ南北に流れる姫川とほぼ一致するように、フォッサマグナの西縁に当たる「糸魚川―静岡構造線」が分布する。この構造線を境界にして、地質学的に西南日本と東北日本に分けられている。構造線以西の地層は、主に古生代石炭紀〜ペルム紀に至る青海―蓮華変成岩帯など、古生代・中生代の堆積岩・火成岩から成り立っている。青海―蓮華変成岩帯は、その断層面に蛇紋岩・輝緑岩・変はんい岩などが介在する複雑な構造を有しており、ヒスイ輝石岩・青海石・奴奈川石など希少な岩石が含まれている。中でも、ヒスイ輝石岩は小滝川や青海川で産出されることが知られており、「小滝川の硬玉産地」「青海川の硬玉産地」が国の天然記念物に指定されている。一方、この構造線以東の地層は主に新第三紀・第四紀の新しい時代の堆積岩・火成岩から成り立っており、構造線の東西で地質が大きく異なる〔鈴木2000〕。このことが、地形・動植物の分布に相違を生み、さらに言語・風俗文化にも影響を与えることとなったといわれている。

市域の南側には、飛騨山脈と西頸城山地がある。飛騨山脈には、県内最高峰の小蓮華山（2,769m）をはじめとして2,000m級の山々が連なる。その主稜は日本海に進むにしたがって高度を急速に減じ日本海に没している。この急崖が国指定名勝の「親不知・子不知」であり、東西文化の障壁となっている。石灰岩からなる黒姫山（1,221m）・明星山（1,188m）では山岳カルストが発達しており、日本最深の白蓮洞（513m）など多数の洞穴が存在する。市域には、ここから産出する石灰岩を資源とした化学工業地帯が形成されている。

西頸城山地は、新第三紀以降の堆積層が隆起した丘陵と、長野県との県境をなす雨飾山（1,963m）や海谷山地など火山性岩石を主体とする山塊から構成されており、さらにその背後には本県唯一の活火山である焼山（2,400m）がある。標高400m以下の小起伏山地域では、主に新第三紀の砂泥岩層から形成されており、地下水量が増大する融雪期、梅雨期、初冬などには、崩落・地滑りが発生する〔鈴木2000〕。地滑り等防止法制定のきっかけとなった柵口地滑り（1947年発生）等、地滑り地が多い地域である。

これらの山地を源流にして、青海川・田海川・姫川・海川・早川などが北流し日本海に注ぐ。中でも姫川はこの地方最長の一級河川であり、全長約60kmに及ぶ。河川沿いには河岸段丘が見られるが、特に姫川と海川の河口岸に発達している。この段丘は高位の洪積段丘から低位の沖積段丘まで6段に細分されている〔鈴木1983〕。高位の段丘には縄文時代〜弥生時代、低位の段丘には縄文時代〜古代、沖積段丘には古代の遺跡が分布しており、遺跡の時期が下がるにしたがって高位から低位へとその分布する主体面を移動させている〔寺崎1988〕。



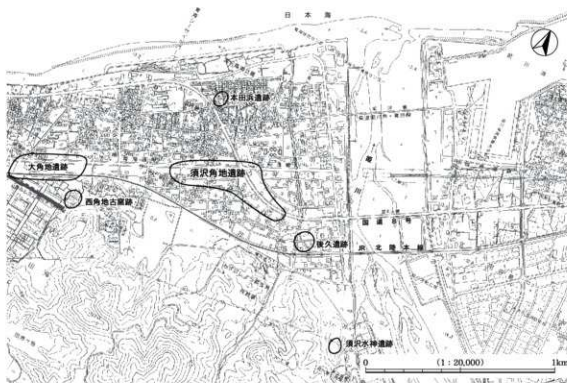
第4図 須沢角地遺跡の位置と周辺の地形区分  
 (大日本帝國陸地測量部 1914 五万分一之尺「糸魚川」原図に【鈴木1983】を加筆)

河川はいずれも急流で、かつ海底が深いこともあり、神積平野は発達していない。最も広い沖積地は姫川と海川の河口間に形成された扇状地で、この扇状地を中心に狭い海岸平野が広がる。このほかの平地地は、河川沿いにわずかな谷底平野が細長く形成されるのみである。また、北東-南西に広がる海岸線沿いには砂丘列が形成されており、姫川河口左岸の須沢では最大幅 300m、最大高 11.5m を測る【鈴木1983】。市街地や主要幹線は、この砂丘上と沖積地など、限られた平地地に細長く立地している。

須沢角地遺跡は、姫川左岸の河口近くに築かれた扇状地の西端に立地する(第4図)。この扇状地は姫川によって形成されたものであり、右岸にも同様の地形を観察できる。遺跡北側の平地地においては、海岸砂丘上に加賀街道が築かれており、その周辺に近世集落が広がっている。かつて存在した水田面は、当遺跡よりも 1m ほど標高が低く、より安定した地盤を利用して集落が築かれたものと考えられる。

## 2 歴史的環境

糸魚川市域における古墳時代・古代・中世の主な遺跡分布は、第6図のとおりである。姫川右岸の糸魚川地区では、標高 100m 以下の緩傾斜の丘陵が発達し、特に標高 50m 前後の河岸段丘上に遺跡が多く分布する。また、近年、北陸新幹線建設に伴う発掘調査等によって、狭い平野部においても遺跡分布が濃密であることが明らかになっている。居住に適した平地地に限られるため、土地利用が特定の範囲に集中した結果と考えられる。ここでは、須沢角地遺跡に関連する古代～中世の遺跡について概観する。



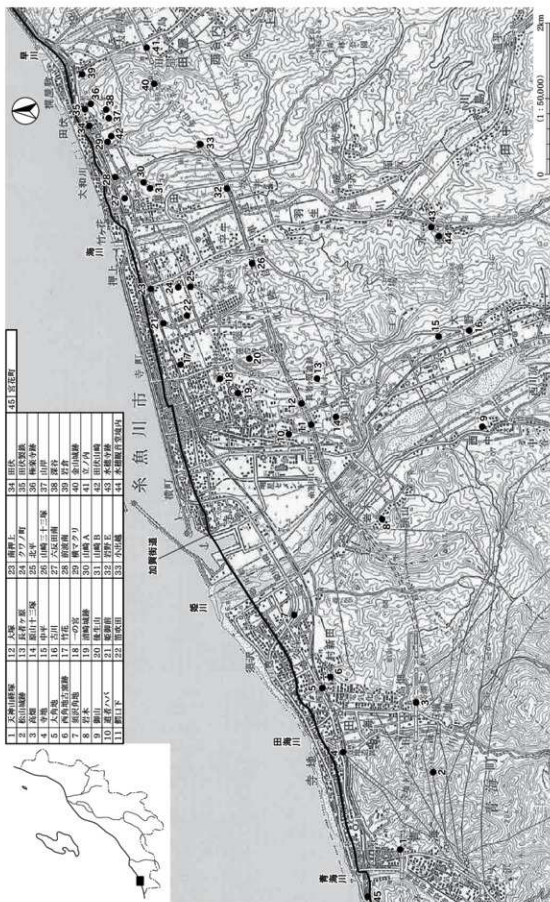
第5図 須沢角地遺跡周辺の地形と遺跡  
(糸魚川市都市計画図(青海地域) 1:10,000 に加筆)

## 古代

古代には、新潟県一帯は越国の一部であった。『日本書紀』持統6(692)年9月の条に「越前国司」の記述があることから、越国は越前・越中・越後に分割されていたと考えられている。この頃の越後国は阿賀野川以北を指しており、頸城郡は越中国に属したと考えられている。『続日本紀』大宝2(702)年の3月の条に越中国の4郡を越後国に分割したことが記されている[米沢1980]。この4郡は、頸城郡・古志郡・蒲原郡・魚沼郡を指すと考えられている。さらに和銅元(708)年に越後国に設置された出羽郡が、和銅5(712)年に出羽国として分立された。これにより、佐渡を除く現在の新潟県の領域が定まったと考えられている。なお、『和名類聚抄』には「国府在頸城郡」とあり、頸城郡内に越後国府があったと考えられる。

頸城郡は越後国の南西端に位置し、天平勝宝4年(752)10月造東大寺司牒(正倉院文書)に頸城郡の郡名が初めて見えるが、『和名抄』(東急本)には「久比支」の訓を付している。頸城郡の郷は10郷が記されており、須沢角地遺跡は頸城郡沼川郷に含まれる。天平勝宝年中(749~756)の東大寺正倉院御物の庸布墨書には「久正郡」と記されている。『和名抄』では高山寺本とも「奴乃加波」の訓を付しており、吉田東伍の『大日本地名辞書』(1907年)では沼川郷を現在の市振から早川谷までの地と推定し、室町時代の「沼河保」とほぼ同じ地域と考えている。

『延喜式』には越後の駅・伝馬として、「滄海8疋、鵜石・名立・水門・佐味・三嶋・多太・大家各5疋、伊神2疋、渡戸船2艘、伝馬頸城・古志郡各8疋」と記されており、滄海駅は青海に比定できる。北陸道越後国駅馬の越後国最初の駅として「滄海馬8疋」とある。他駅が5疋に対して、越中国佐味駅と並んで8疋と多い。両駅の間は約24kmと長く、親不知・子不知の難所を抱えていたからであろう。佐味駅から滄海駅に至る道筋は、海岸沿いに親不知を越えたとする海道説と上路を経て青海川沿いに下った山道説とがある[佐藤・田海<sup>1)</sup>1991]。当遺跡は、青海地域で現在発見されている当該期の最大の集落で



第6図 須次角地遺跡周辺の主な遺跡（加賀街道の位置は「上田1991」による）

【国土地理院発行「高度図」、小段、1:50,000図、平成8年発行】



あり、澁海駅の有力な候補地と考えられている。

青海地区（旧青海町域）における古代の遺跡は、集落跡と窯跡が検出されている。姫川河口近くに位置する当遺跡（7）は、昭和62（1987）年・平成19（2007）年に発掘調査が実施され、7世紀末～9世紀前半の集落跡であることが明らかにされている【土田<sup>ほか</sup>1988、今村<sup>ほか</sup>2008】。また、当遺跡の西南西600mの丘陵裾には西角地古窯跡（6）が存在する。窯体の一部・窯壁・焼土とともに多量の須恵器が出土しており【寺村・安藤<sup>ほか</sup>1979】、8世紀末～9世紀初頭前後の窯跡と考えられている【春日1998】。須沢角地遺跡からは、西角地古窯産と考えられる須恵器が多数出土している。この中には、焼歪みが著しく製品として流通するとは考え難いものを多数含んでおり、窯を操業する集団との密接な関係が想定される。

糸魚川地区（旧糸魚川市域）の道着ハバ遺跡（10）では、掘立柱建物や井戸といった遺構とともに、多量の須恵器・土師器のほか、灰釉陶器・緑釉陶器が多く出土しており、当地域の中心的役割を担った遺跡と推定されている。このほかに8世紀末～9世紀に土師器生産が行われた小出越遺跡（33）【鈴木<sup>ほか</sup>1998】、多数の製塩土器が出土した立ノ内遺跡（41）【高橋1988】、数百点に及ぶ土師器を廃棄した土坑が注目される山崎A・B遺跡（30・31）【木島2007】などの調査事例がある。

## 中世

青海地区では、山城跡や経塚の存在が知られている。勝山城跡は、標高328mの勝山山頂に築かれている。天正年間（1573～1582）頃、越中への前進基地として築城されたといわれており、戦国時代は同方面を押さえる要衝であったと考えられている【平野・渡辺1968】。寺地の南方、松山の尾根上に南北500mにわたって築城された松山城跡（2）は、標高170mの地点に本丸があり、空堀や帯曲輪・堀曲輪で幾重にも固められている。青海字石垣に所在する天神山遺跡（1）では、1919（大正8）年の宅地造成に伴い、仁安2（1167）年銘のある珠洲焼の経筒が偶然発見されている【金子1975】。

糸魚川地区では、御山遺跡（9）・中平遺跡（15）・古川遺跡（16）・水保観音堂境内（44）・北平遺跡（25）・クワノ町遺跡（24）・姫御前遺跡（21）・竹花遺跡（17）・山崎A・B遺跡（30・31）等が知られており、十一面観音立像（国重要文化財）を安置する水保観音堂境内からは中世陶磁器類が出土したことから、水穂寺跡との関係が考えられている【山岸・田村2004】。また、段丘～丘陵上には、中世後期～近世初期の原山十三塚（14）や山崎三十三塚（26）【木島1989】が分布する。

当地域における中世の集落については、北陸新幹線建設に伴う発掘調査によって、平野部に多数存在することが明らかになってきた。特に、山岸遺跡（37）においては、鎌倉時代（13世紀）の大型の掘立柱建物や庭園が検出され注目されている。出土した銅製品には傘紋が施されており、鎌倉北条氏一族の名越氏を示す家紋である可能性があり、沼河郷地頭の名越氏と深く関係のある中心的な屋敷と考えられている【春日2010】。このほか、青海地区の宮花町遺跡（45）では、13～15世紀の土坑墓による集団墓地が見つかり、15体の土葬人骨が出土している【小池<sup>ほか</sup>2012】。類型の少なさと親不知・子不知海岸の入り口という遺跡の立地から注目される。

また、多量の木製品が出土する実態が、山岸遺跡、寺地遺跡（4）【相羽2002】、姫御前遺跡、竹花遺跡の調査事例によって明らかにされつつある。木製品が特定の範囲から多量に出土する上、箸状・棒状の製品が地面に突き立てられて検出されている。この特異な出土状況の解釈については多角的な検討を要するが、特徴的な祭祀行為が行われていたことを窺い知ることができる。今後の調査の進展によって、糸魚川地域における中世社会の一端が明らかにされていくものと期待される。

## 第三章 調査の概要

### 1 グリッドと調査区の設定

今回の調査区は、2007年度調査区の7区、2009年度調査区の8区間に存在する。したがって、グリッドの設定・名称は、これらの調査区に連続するように合わせた。

グリッドは、2004年度の発掘調査区11区のグリッドを延長し、北陸新幹線の法線と並行するように設定した。その基準ラインは、平成16年度の発掘調査区内にあるP4橋脚(11区)と、2007年度の発掘調査区内にあるBLP2橋脚(2区)の中心座標を結ぶ線とした。基準ラインの座標値は、P4橋脚の中心が、世界測地系の $X=114671.402$ ・ $Y=-59715.894$ 、BLP2橋脚の中心(2区031B杭)が、 $X=114526.372$ ・ $Y=-60013.419$ である。なお、本調査区の010B杭は、 $X=114618.822$ ・ $Y=-59823.761$ ・標高6.397mである。グリッドの南北ラインは、真北から25度59分14秒西偏する。

測量の基準となるグリッドは、10×10m四方の大グリッドを設定し、東西ラインでは東から01・02…とアラビア数字を、南北ラインでは北からA・B…のアルファベットを付し、「010B」などと組み合わせて表示した。大グリッドはさらに2×2m四方の小グリッドに区分し、1～25の数字を配した(図版3)。これを大グリッドと組み合わせ、「010B6」などと表示した。

なお、2008年度の発掘調査では、グリッドの東西軸が一致するものの、南北軸は10mずれている。大グリッドの名称もほかの調査区との連続性を考慮せず付けられている。煩雑であるが、詳細は図版2・3を参照されたい。

### 2 旧地形と遺跡の立地

地元住民によれば遺跡名の「角地」とは、この地域が周囲より高い台地状のような地形だったことに由来する呼び名と言われている[辻2006]。加藤は、過去の調査結果をもとに旧地形を復元している。基本層序の礫層検出高を用い作成した旧地形の等高線図(図版2)を見ると、1987年度の旧青海町教委の調査区が最も標高が高く、ここから西に向かい徐々に低くなっていることがわかる。さらに姫川左岸で舌状に張り出す礫層が形成された様子がうかがえる。また、地形区分図(第4図)からは、須沢角地遺跡が姫川扇状地の西端であることがわかる。過去の調査履歴(第1章第2節)を照らし合わせれば、この舌状に張り出した礫層の上に古代以降の遺跡が構築されていたことになる。特に旧青海町教委の調査区(1987年度)、糸魚川市教委の調査区(2007年度)は、遺構・遺物の検出状況から古代・中世の中心部分に相当すると考えられ、ここから西に離れるにしたがい、遺構・遺物は徐々に希薄になる。このことは地形からも容易に推測できる。

なお、礫層の形成年代は明らかではないが、礫層の上位から縄文時代前期前葉頃の遺物が認められることから、それ以前と推定している[加藤2011]。

### 3 基本層序(第7図・図版5・13)

本調査区の基本層序は、2009年度の調査区(8区)に隣接することから色調、記述等に微妙な相違はあるものの、おおむね同じである。したがって、同じ層名を付けた。以下、層序を記述する。

0層：盛土層。新幹線の本線橋脚間に盛られた盛土。約2mの層厚。

I層：10YR5/1 褐灰色シルト。近現代の水田耕作土。約10cm。

II層：10YR6/8 明黄褐色砂質シルト。鉄分の沈着が著しい。近世の遺物包含層。約10～20cm。

III層：10YR4/1 褐灰色砂。2009年度調査では、中世後期の遺物包含層とされている。約10～15cm。

IV層：10YR4/1 褐灰色粘質シルト。III層より色調が暗く、茶色味を帯びる。炭化物を少量含む。2009年度調査では、中世前期の遺物包含層とされている。約10～15cm。

V層：7.5YR3/2 黒褐色粘質シルト。暗灰色粘土をブロック状に少量含む。古代上層の遺物包含層。約10cm。

VI層：10YR4/3 にぶい黄褐色シルト。古代下層の遺物包含層。古代上層の遺構検出面。なお、古代上層と下層の遺物には、明確な時期差は認められなかった。約10cm。

VII層：10YR4/1 褐色シルト。古代下層の遺構検出面。地山。約30cm以上。

VII層上面から約1.8m下層(標高4.0m前後)には、礫層の堆積が予想されたが、調査面積が狭く盛土も厚いことから調査の安全を考慮し、深掘りは標高4.7mまでにとどめた。



## 第IV章 遺 構

### 1 概 要

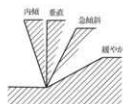
今回の調査では、これまでの調査成果から少なくとも中世で2面、古代で2面の遺物包含層及び遺構検出面があるものと予想し調査を進めた。しかし、調査面積が狭いことや遺跡の西端と推測される部分を調査したことから調査面積に対する遺構密度は高いが、それほど遺構は多くない。中世の遺構は認められず、古代の遺構は調査区境の壁面で認識した土坑1基のほか、ピット11基、性格不明遺構3基が検出された。

### 2 記 述 方 法

遺構名称の略号は土坑：SK、ピット：P、性格不明遺構：SXである。遺構番号はこれまでの調査で使用された番号との重複を避けるため、遺構の種類にかかわらず1101～1115の通し番号を使用した。本文では遺構を種別ごとに説明するが、ピットと性格不明遺構は、観察表も併用した。

平面形態及び断面形態の分類は、『和泉A遺跡』で示した分類〔加藤1999〕を用いた。

遺構の規模の長径・短径は最大値、深さは確認面からの最深部の値である。



### 3 遺 構 各 説

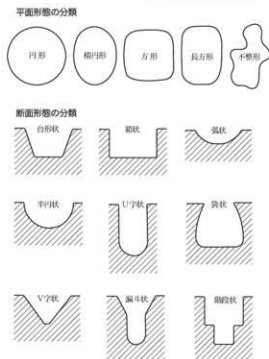
遺構は、時代別、種類別に記述する。

#### A 古代の遺構

##### 1) 土 坑

SK1115 (図版4・5・17)

調査区北隅の010A17グリッドに位置する。東壁、北壁の断面でのみ確認でき、南北67cm以上・東西20cm以上、深さ33cm、標高5.64mを測る。平面形は土層観察用のトレンチで破壊され不明。断面形は土層観察用のトレンチを見る限り、やや凹凸のある半円状を呈するものと思われる。遺構検出面はV字途中から掘り込まれており、古代に所属する土坑である。覆土は黒褐色粘質シルトに炭化粒や土師器細片が含まれ、下層はやや色調が明るくなる。遺物は土師器細片が7点出土している。



第8図 遺構の平面形態と断面形態の分類  
〔加藤1999〕を転載

## 2) ビ ッ ト

## P1101～1111 (図版4・5・13～16)

V層上面を遺構検出面として11基のビットを検出した。平面は円形～楕円形、断面は台形状、半円状、弧状が多く見られる。規模は長径40～50cm、短径30cm、深さ20cm程度の中規模なビットが多い。覆土は1基を除き単層であり、黄褐色～黒褐色シルトの覆土である。いずれもV層に近似した覆土で、検出層位との関連から古代に所属する。遺物は須恵器や土師器の細片が少量出土した。P1102から出土した須恵器有台杯(28)が唯一、図示できた遺物である。

ビットは調査区のやや北寄りに南西から北西にかけて斜めに、二か所にまとまって分布するが、関連性が見られず、柱穴の痕跡なども認められなかった。

ビット番号	検出地点	平面形	断面形	覆土	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	底面標高(m)	出土遺物(点)	備考
P1101	010A17・22	楕円形	弧状	単層	54	40	21	5.72	土師1	
P1102	01A25・011B5	楕円形	台形状	レンズ状	67	39	30	5.60	須恵1、土師1	須恵実器 No.28
P1103	01A25	円形	半円状	単層	32	28	15	5.76		
P1104	01A25	円形	台形状	単層	28	27	19	5.71		
P1105	01A25・010A21	楕円形	台形状	単層	42	28	16	5.75	土師2	
P1106	010B6・7	円形	台形状	単層	47	37	13	5.81		
P1107	010B6	楕円形	台形状	単層	35	29	20	5.75		
P1108	011B10	楕円形	U字状	単層	53	42	32	5.61	須恵1、土師1	
P1109	011B10・15	楕円形	V字状	単層	46	35	24	5.70	土師1	
P1110	011B10	円形	弧状	単層	27	27	10	5.84		
P1111	010B7	円形	弧状	単層	33	28	16	5.78		

第2表 ビット観察表

## 3) 性格不明遺構

## SX1112～1114 (図版4～6・13・16・17)

調査区の北と南の端で見つかった遺構であるが、いずれも調査区外に延びるため、全容は不明である。検出層位はV層上面で、検出プラン、遺構の立ち上がりや壁面には、鉄分の沈着が見られた。プランは調査区外に延びるため、断定はできないものの、いずれも不整形を呈する。断面形も同様に凹凸のある不整形を呈する。覆土は2層に分層されるものの(SX1113・1114)、上面を覆うV層の浸透で汚れているもので、単層と見なされる。にぶい黄褐色砂質シルトで、炭化物をはじめとする不純物を含まない砂質シルトの純層である。洪水堆積のように時間をかけず堆積した層と考える。2009年度の発掘調査でも検出され、報告では樹痕と判断している。遺物はV層との境を接する覆土1層から土師器細片が出土した。V層からの粉れ込みと考えられる。

遺構番号	検出地点	平面形	断面形	覆土	長さ(m)	幅(m)	深さ(m)	底面標高(m)	出土遺物(点)	備考
SX1112	010A16・17	不整形	不整形	単層	(1.35)	(0.37)	(0.20)	(5.70)	土師2	遺構の外面に鉄分の沈着著しい。
SX1113	01A20・25、010A16	不整形	不整形	ほぼ単層	(2.93)	(2.82)	(0.53)	(5.30)	土師2	遺構の外面に鉄分の沈着著しい。
SX1114	011B10・15・20、010B11・12・16・17	不整形	不整形	ほぼ単層	(4.57)	(4.24)	(1.04)	(4.76)	土師10	遺構の外面に鉄分の沈着著しい。

第3表 性格不明遺構観察表(カッコ内は現存値)

## B 中世の遺構(図版4・13)

2009年度の発掘調査でⅢ層:中世後期の遺物包含層、Ⅳ層:中世前期の遺物包含と認識され、今回の調査でも同じくⅢ・Ⅳ層が認識でき、遺物もわずかではあるが出土したことから、Ⅳ層上面、V層上面でそれぞれ遺構検出を行った。遺構は検出できなかったが、ほぼ平坦な地形であることが判明した。

## 第V章 遺 物

### 1 概 要

調査で得られた遺物は、細かな破片が多いものの、調査面積の狭さに比すれば比較的多い方である。古代の土師器4箱（箱サイズ54×34×10cm）、須恵器3箱、中世の珠洲焼5点、瀬戸美濃焼2点、縄文時代の石器7点が出土している。このほか古代または中世に所属する石器8点、鉄製品2点、鉄滓4点、土製品の羽口2点がある。これらの遺物は遺構に伴うものは極めて少なく、そのほとんどが包含層からの出土である。また、調査区全体から偏りなく出土している。

基本層序の分層が比較的容易であったため、遺物の大半は層別別に取り上げることが可能であった。口縁部残存率計測法を用いた層別別器種構成比率（第4表）によれば、古代の土器は、古代の遺物包含層であるV層からの出土が最も多く、次いで同じく古代の遺物包含層であるVI層から出土である。IV層からは、中世以降の遺物包含層と推定されており、古代の遺物は極端に少なくなる。

中世の土器は、7点（口縁部は1点のみ）と少ないものの、すべてIV層から上位での出土である。

### 2 記 述 方 法

土器は比較的多く出土したものの、破片が多い。したがって、残存率が良好な遺物はもちろんであるが、破片資料であっても器形の全体形を復元するように努めた。また、全体の器形を復元できない土器も、土器の出土傾向や遺跡の特徴を明らかにするために破片資料を掲載した。

遺物の記述は、本文と観察表の両者を併用した。本文では観察表をまとめた形で述べ、個々の遺物の説明は、主に観察表に委ねた。

観察表は図示した遺物の法量、土器の胎土、調整などは巻末の観察表として示した。観察表は、土器・陶器、土製品、鉄製品、石器のそれぞれで作成した。

出土層別		III層			IV層			V層			VI層		
種類	器種	破片数 (点)	口縁部 残存率 (/36)	比率: 口縁部 (%)	破片数 (点)	口縁部 残存率 (/36)	比率: 口縁部 (%)	破片数 (点)	口縁部 残存率 (/36)	比率: 口縁部 (%)	破片数 (点)	口縁部 残存率 (/36)	比率: 口縁部 (%)
土師器	無台碗							10	17	7.6	6	10	8.7
	小壺							2	7	3.1	4	6	5.2
	長壺				2	3	4.5	4	7	3.1	2	5	4.3
	長袋小罎							1	1	0.4	1	3	2.6
須恵器	杯蓋	3	3	27.3	8	12	18.2	19	56	25.0	11	26	22.6
	有台杯	1	1	9.1	1	3	4.5	6	20	8.9	3	14	12.2
	無台杯	6	7	63.6	18	28	42.4	47	82	36.6	22	51	44.3
	壺・瓶類				4	10	28.8	12	28	12.5			
	壺							2	2	0.9			
	壺少横瓶							1	4	1.8			
珠洲	すり鉢				1	1	1.5						
合 計		10	11	100.0	34	66	99.9	104	324	99.9	49	115	99.9

第4表 須沢角地遺跡の層別別器種構成比率

### 3 遺物各説

遺物の記述は、時代別、種類別に説明する。

#### A 古代の土器 (図版7・8・18・19-1～81)

本発掘調査で出土した遺物の大半は、奈良・平安時代の遺物である。口縁部残存率計測表を基にした層位別器種構成比率(第4表)を見ると、古代の遺物包含層のV・VI層から82%の土器が出土している。須恵器と土師器の比率は、須恵器86%、土師器14%で須恵器が圧倒的に多い。器種別では須恵器無台杯40.5%、須恵器杯蓋23.3%、須恵器壺・瓶類11.3%、須恵器有台杯9.2%、土師器無台椀6.5%、土師器長甕3.6%、土師器小甕3.1%となる。

土器の編年や年代観は、[春日1998・1999・2010]に従った。古代の土器は、春日編年[春日1999]のⅢ期からⅤ期まで認められる。実年代でいうとⅢ期が8世紀初頭～8世紀前葉、Ⅳ期が8世紀中葉～9世紀初頭、Ⅴ期が9世紀前葉～9世紀中葉である。

細片が多く時期を明確に確定できる土器は少ない。最も多い土器は、Ⅳ2・Ⅳ3期の頃のものである。また、これまでの過去の調査でも明らかのように、焼歪みの顕著なものや他個体との溶着痕が見られるものが認められた。通常、消費遺跡では見られないその傾向は、近隣に須恵器窯の存在を示唆し、窯の操業に関係する集団によって築かれた集落であることを想定[加藤2011]した。当遺跡の西方約500mには西角地古窯跡(第5・6図)が存在し、当遺跡の最盛期と操業期間が重複する。電気化学工業株式会社田海工場の用水路建設工事が行われた際に採集された平箱約10箱余りの須恵器が糸魚川市長者ヶ原考古館に保管されている。西角地古窯跡出土資料は、当遺跡を評価する上で欠くことができないため胎土を比較した。胎土は肉眼観察による分類を行い、このうち一部については、自然科学の分析を行った(第VI章参照)。ここでは[加藤2011]と同様に肉眼観察による胎土の分類基準を示すこととした。

- A類：混入物が少なく緻密で均質な胎土である。堅緻に焼き上げられ、灰色から青灰色を呈するもの。
- B類：直径2mm以下の混入物が多い胎土である。堅緻に焼き上げられ、灰色を呈するもの。
- C類：直径2mm以下の混入物が認められる胎土である。焼成が不十分で、灰白色を呈し、粉っぽいもの。
- D類：その他の胎土である。備考欄に個別に記述する。

また、黒い吹き出しの顕著なものが、当遺跡及び西角地古窯跡の特徴であることから、黒い吹き出しが見られるものには胎土分類の後に「+」で表現した。胎土の混入物は、白＝白色粒子、長＝長石、石＝石英、黒＝黒色粒子、礫＝砂礫、海＝海綿骨針である。なお、土師器、珠洲焼、瀬戸美濃の胎土は、直径2mmの砂礫を多量に含むものと、混入物をほとんど含まないものと、その中間のものがある。順にそれぞれ「粗粒・中間・精良」とした。

また、須恵器の焼成方法の手がかりとなる自然軸・降灰の痕跡は「灰化」、黒変は「黒化」と観察表に記述した。

#### 須恵器無台杯(1～16)

図示したものはすべて包含層出土で、V・VI層から多く出土するが、9・12・13はⅣ層出土である。12・13を除いて底部の切り離しは、すべて回転ヘラ切りである。1～4は全体の器形が推定できるもので、小ぶりな作りで、体部は底部から急傾斜に直線的に立ち上がる。春日編年のⅣ2・3期に相当する。5～



11は底部のみの破片である。8は薄手の作りであるが、ほかは企画性が見られる。胎土や焼成、黒色の吹き出しから西角地古窯跡産と推定される。12・13は底部の切り離しが回転糸切りである。胎土はシルト質で均質で西角地古窯跡産とは異なる。13は底径が小さく大きく開く器形から、口径との差が大きいと判断される。当地域に隣接する富山県新川郡では、9世紀から糸切り技法の須恵器生産が行われる〔池野2011〕ことから、Ⅴ期の所産と推定される。14～16は薄手の作りで、粘土質で均質な胎土である。佐渡小泊産の無台杯で、Ⅴ期に相当する。

#### 須恵器有台杯 (17～31)

28を除き、包含層出土である。19・24・32・35はⅣ層出土、ほかはⅤ・Ⅵ層出土である。底部が遺存するものは、すべて回転ヘラ切りである。17・18は立ち上がり急で、体部は直線的に延びる。Ⅳ2・3期頃と推定される。19～23は体部から口縁部の破片である。立ち上がり急で、直線的に延びる。胎土や焼成、黒色の吹き出しなどから西角地古窯跡産と推定され、Ⅳ2・3期頃か。24は底径が大きく、大型品になるものと思われる。胎土は粘土質で均質で、西角地古窯跡産とは明らかに異なる。高田平野東部産の搬入品と考えられ、Ⅲ期の所産と推定される。25は底部破片であるが、立ち上がりが緩く大きく開くものと思われる。胎土はシルト質で均質で、高田平野西部産と推定される。Ⅲ期の所産と思われる。26～29はやや底径の大きい有台杯で、底部から急に立ち上がる器形である。29はシルト質で均質な胎土から、平野西部の滝寺古窯跡群産と推定される。30～37は小型の器形で、急に立ち上がるものと推定される。胎土や焼成、黒色の吹き出しなどから西角地古窯跡産と思われ、Ⅳ2・3期に所属する。

#### 須恵器高杯 (38)

有台杯に短脚の付く高杯X〔小田2004〕であり、信濃特有の器種といわれている。シルト質で均質な胎土から、高田平野西部の滝寺古窯跡群産と推定される。Ⅳ2・3期に相当する。

#### 須恵器杯蓋 (39～51)

39は出土層位不明。42を除き、Ⅴ・Ⅵ層出土である。39の摘みは、高さが低く径が小さい。これ以外は、摘みを欠く杯蓋の破片である。頂部が遺存するものは、切り離しがすべて回転ヘラ切りである。端部が長めに垂下し、しっかり面取りされる41・49は、Ⅲ期まで遡る可能性がある。また、端部がやや長めに垂下し、中央部で屈曲し猫足状になる46・51はⅣ2期以降の可能性がある。このほか端部がやや長めに垂下するが緩く屈曲する44・50、端部が短く先端部が丸みを帯びる42・43・45、先端部が外にわずかに折れる47・48などがある。40は口径が大きく端部も厚みがあることから、Ⅳ1期まで遡る可能性がある。

#### 須恵器蓋 (52)

環状の摘みが付く蓋で、1点のみの出土である。胎土B類で、黒色の吹き出しが著しいことから西角地古窯跡産と推定される。Ⅳ2・3期に相当する。富山県上末窯〔宇野が1989〕などに類例が見られる。

#### 須恵器盤 (53)

1点のみの出土である。焼成不良の胎土C類である。西角地古窯跡産と推定されることから、Ⅳ2・3期に相当する。ほかに類例として、今回胎土分析した西角地古窯跡産の盤(西12)、糸魚川市小出越遺跡16号土坑出土資料<sup>1)</sup>がある。いずれも胎土はC類で、焼成不良である点で共通する。

1) 小出越遺跡16号土坑出土の盤は、胎土、焼成が悪いため、土師器として報告されている。

**須恵器壺 (54～57)**

口縁部破片 (54～56)、口縁部から頸部の破片 (57) である。口径や口縁端部の形状はそれぞれ異なるが、壺などに比べ胎土は精良で堅緻に焼成されている。県教委の発掘調査 (平成 20 年度) で出土した壺でも同様な指摘がなされている。57 は頸部に沈線が 2 条巡るが、西角地古窯跡出土資料 [千家ほか 1979]、今回胎土分析した西角地古窯跡産の壺 (西 4) に類似が見られる。

**須恵器横瓶 (58)**

1 点のみの出土で、体部破片である。外面は平行タタキ後カキメ、内面は青海波アテ具後、一部カキメが施される。

**須恵器甕 (59～66)**

口縁部破片 (59～61)、体部破片 (62～66) である。59 は唯一口径が復元できる資料であり、推定値で 16.4cm を測る。60・61 は口縁端部が水平で、外面に凸帯と波状文が巡る。器形や文様が似ているが、焼成、凸帯や波状文の形状が異なる別個体である。62～66 は外面平行タタキ目、内面青海波当て具が施される。なお、66 は外面に溶着痕が認められる。凸帯と波状文が口縁部に巡る甕は、西角地古窯跡でも多く見られる [青木編 1966]。

**土師器椀 (67～69)**

いずれも底部破片で、切り離しは回転系切りである。V・VI 期頃であろう。

**土師器甕 (70～77)**

口縁部破片 (70)、体部破片 (71～74)、底部破片 (75～77) である。70 は唯一口径が復元でき、17.8cm を測る。内外面ともヨコハケメが施される。71～73・75 は外面タテハケメ、内面ヨコハケメが施される。74 は外面平行タタキ、内面青海波アテ具で、体部下半の破片と推定される。76・77 は外面ナデ、内面ハケメが施される。すべて非ロクロの甕で、多くは IV 2・3 期の所属するものと思われる。

**土師器製塩土器 (78)**

底径が復元できたのは 1 点のみであり、径 12.4cm を測る。外面指おさえ痕、内面ヨコナデ、底外面板状痕が見られる。

**土師器小甕 (79・80)**

いずれもロクロ成形である。79 は口径 12.8cm を測る。

**土師器鍋 (81)**

口縁部破片で、口径 32.6cm と推定される。ロクロ成形で、内外面カキメが見られる。

西頸城地域の土師器煮炊具は、IV 期は非ロクロ主体で、V 期にロクロ成形に移行してゆく [春日 1998] ことから、小甕・鍋は V・VI 期の所産と考えられる。

**B 中世の土器・陶器 (図版 9・19・20-82～87)**

出土数は珠洲焼 5 点、瀬戸美濃焼 2 点と少なく、細片資料である。調査区内からまばらに、出土層位はいずれも IV 層から上位である。以下、種別ごとに説明する。

**珠洲焼播鉢 (82)**

口縁部破片である。内外面ロクロナデで、スリ目は認められない。IV 層からの出土であることから、古手の可能性がある。

珠洲焼甕 (83～86)

いずれも体部破片である。外面平行タタキ、内面礫アテ具痕が見られる出土層位から中世後期に属すると考える。

瀬戸美濃焼天目茶碗 (87)

1点のみの出土である。体部破片で、内外面に鉄軸が施される。Ⅱ層（近世遺物包含層）出土であり、中世からの紛れ込みと推定される。

C 土 製 品 (図版9・20-88・89)

羽口 (88・89)

V層から2点出土している。いずれも非スマキ作りの破片であるが、柄、燃焼部に接する部分は洋化している。調査区の東約5mには、2009年度の発掘調査(8区)で鍛冶炉を伴う堅穴建物が見つかったことから、同遺構に関連する可能性もある。出土層位から古代に所属する。

D 鉄 製 品 (図版9・20-90・91)

釘 (90)

基部が平らな平釘で、脚部は欠損している。

刀子 (91)

茎部分と推定され、刀身は欠損する。

釘・刀子はV層出土であり、出土層位から古代に所属する。

E 石 器 (図版9・20-92～99)

砥石 (92～95)

92～94は凝灰岩製で、94は直方体に仕上げている。95は珪質粘土岩製で、京都鳴滝産と考えられる。出土層位から、92・93は古代に、94・95は中世と判断される。

敲石 (96・97)

厚めの扁平礫の周縁(96)、両側縁(97)に敲打痕が見られる。97は敲打痕が帯状に広く展開する。出土層位から中世の所産と考えられる。

剥片 (98・99)

いわゆる貝殻状剥片と呼ばれている横長剥片で、VI層から出土している。糸魚川地域では古墳時代前期まで存続する〔加藤2008〕が、ほかに古墳時代の遺物がないことから、縄文時代の所産と考えている。

F 西角地古窯跡出土須恵器 (図版10・20-西1～西12)

今回の発掘調査で出土したものではないが、胎土分析用に糸魚川市教委から資料提供していただいた。西角地古窯跡は、糸魚川市今村新田字西角地439番地に所在した須恵器窯跡である。今村新田地区内にある独立低台地の南斜面に立地し、標高は約10mを測る。電気化学田海工場の用水路建設で破壊され、現状は用水路である。出土遺物は旧青海町教委に保管されていたが、平成17年糸魚川市との合併に伴い、糸魚川市教委に移管された。

出土した須恵器は、平箱で約10箱、窯体・灰原などの窯形態や窯数などの詳細は明らかでなく、窯跡

のどこから出土したのかわからない。出土遺物には、窯壁の破片のほか、重ね焼きのまま溶着したものや歪んだもの、破片が多く保管されている。器種では甕、壺、杯、杯蓋、盤、鍋などがある。

このうち12点を胎土分析試料とした。分析試料は、本発掘調査で出土した須恵器と比較するため、同様に胎土、焼成を考慮して抽出したが、A類とB類には、明確に区分できないものもある。

A類：混入物が少なく緻密で均質な胎土である。堅緻に焼き上げられ、灰色から青灰色を呈するもの。(西1～西4)

B類：直径2mm以下の混入物が多い胎土である。堅緻に焼き上げられ、灰色を呈するもの。(西5～西8)

C類：直径2mm以下の混入物が認められる胎土である。焼成が不十分で、灰白色を呈し、粉っぽいもの。(西9～西12)

また、抽出したのものにはすべて黒色の吹き出しが見られるが、西3は特にその傾向が著しかった。

なお、西角地古窯跡出土須恵器の年代観は、平安時代初頭〔千家<sup>ほか</sup>1979〕、800年を前後する年代(土田・小池<sup>ほか</sup>1988)、8世紀末～9世紀初頭〔春日1998〕とされている。

以下、器種ごとに説明する。

#### 無台杯 (西10)

小ぶりの作りで、底部から急に直線的に立ち上がる。

#### 有台杯 (西1・西2・西5・西6・西9)

口径の大きいもの(西9)から小さいもの(西5)まである。また身の深いもの(西1)から、浅いもの(西9)がある。底部の切り離しはすべて回転ヘラ切りで、高台は外側に踏ん張り、内端接地である。底部から急傾斜に直線的に立ち上がる。いわゆる箱型を呈する器形であり、作りに共通性が見られる。

#### 杯蓋 (西3・西7・西11)

小ぶりの作りで口径11.6～12cm、器高1.9～2.3cmを測る。頂部の切り離しは回転ヘラ切りで、端部は短く垂下し、丸みを持つもの(西7・西11)と単純に垂下しただけのもの(西3)がある。摘みは低めで小ぶりの擬宝珠形である。

#### 盤 (西12)

底部から急斜に直線的に短く延びる器形である。底部の切り離しは回転ヘラ切りである。糸魚川市小出越遺跡16号土坑、本調査でも出土しており、胎土、焼成は近似する。なお、この試料は大角地遺跡で報告された西角地古窯跡出土須恵器の実測図8〔千家<sup>ほか</sup>1979〕と同一資料と思われる。

#### 壺 (西4)

長頸壺の口縁から頸部であり、垂直に延びた頸部は口縁でラッパ状に外反し、端部は徐々に薄くなる。頸部付近には2条の沈線が巡る。新幹線関連の発掘調査や本調査では壺の口縁がいくつか出土しているが、いずれも胎土は精良で、焼成が堅緻である。なお、この試料は大角地遺跡で報告された西角地古窯跡出土須恵器の実測図14〔千家<sup>ほか</sup>1976〕と同一資料と思われる。

#### 甕 (西8)

口縁部から体部上半の破片であり、口径20.8cmを測る。「く」の字に外反する頸部は、口縁端部で上方につままれる。口縁部内外面クロコナデ、体部は外面平行タタキ、内面青海波アテ具痕である。

## 第VI章 自然科学分析

### 1 須沢角地遺跡出土須恵器の胎土分析

パリオ・サーヴェイ株式会社

#### A はじめに

須沢角地遺跡（新潟県糸魚川市須沢地内）は、姫川河口域の左岸に位置する。本地域の地形分類図〔鈴木1983〕を参考とすると姫川河口付近には小規模な扇状地の分布が認められ、本遺跡は姫川左岸側の扇状地の側端付近に立地する。

須沢角地遺跡では、これまでの発掘調査により古代を主体とする集落であることが明らかとされており、竪穴建物や掘立柱建物、土坑、畑作溝、ピット等が確認されている。また、焼き歪みや溶着した須恵器等が多く出土したことから、窯の操業に係る集団によって築かれた集落の可能性が想定されている。

本報告では、本遺跡から多く出土した西角地古窯跡と推定される須恵器（消費地資料）と、須沢角地遺跡の西方約500mの丘陵端部に位置する西角地古窯跡から採取された須恵器（生産地資料）を対象として、須恵器胎土の化学成分の比較対照によりその関係性について検討を行った。

#### B 試料

分析に供された試料は、担当者により選択された須恵器21点である。内訳は、須沢角地遺跡から出土した須恵器9点（報告番号：4, 19, 21, 28, 37, 51, 52, 53, 57）と西角地古窯跡から採取された須恵器12点（報告番号：西1～12）からなる。試料の詳細を第5表に記す。

これらの試料は、須恵器胎土の肉眼観察に基づき、A・B・Cの3類に分類されており、さらに本遺跡及び西角地古窯跡の出土資料の特徴として黒い吹き出しが認められることが指摘されている。本分析では、後述する分析前の事前調査として各試料について実体顕微鏡を用いて表面観察を行ったところ、以下のような特徴が認められた。

##### 1) A 類

A類は、基質がシルト質またはシルト～極細粒砂質なものが多く、径0.05mm以下の黒灰色の溶融ガラスを極めて微量散含する。ガラス化していないものは、径2mm以下程度の灰色の点紋を有している。石英、長石類を極めて微量～微量程度含み、一部、輝石類を伴うものが存在する。

##### 2) B 類

B類は、基質がシルト～粘土質またはシルト～極細粒砂質であり、溶融ガラスが発泡した孔隙を散含するものや、黒灰色の溶融ガラスを極めて微量～微量程度で含むものなどが認められる。溶融ガラスの発泡が著しく、スコリア様の外観を示し、径4mmに達するものも認められる。凝灰岩、砂岩とみられる白色や灰色を呈する岩片を微量程度含むものもあり、最大径は4mmに達する。鉱物片としては石英、長石類が認められ、極めて微量～微量程度で散含される。

## 3) C 類

C類は、基質がシルト～粘土質が中心であり、明るめの色調を示す。径1mm以下程度の白色または灰色の岩片を極めて微量～微量程度含むものが多く、径3mm以下で球状～楕円状の孔隙を散点状に含むものなども認められる。鉱物片として石英、長石類が極めて微量～微量程度含み、輝石類や磁鉄鉱類の金属鉱物を伴うものも含まれる。

なお、須沢角地遺跡及び西角地古窯跡の須恵器胎土の特徴とされる「黒い吹き出し」として認められるものは、黒灰色を呈する溶融ガラスに相当すると考えられる。

## C 分析 方法

胎土分析は、現在様々な分析方法が用いられており、鉱物組成や岩片組成を求める方法と化学組成を求める方法とに大きく分けられる。前者は切片による薄片作製が主に用いられ、後者では蛍光X線分析が最もよく用いられている。前者の方法は、胎土の特徴が捉えやすいこと、地質との関連性を考えやすいことなどの利点があり、胎土中における砂粒の量や、その粒径組成、砂を構成する鉱物片、岩石片及び微化石の種類等も捉えることが可能であり、得られる情報が多い。ただし、胎土中に含まれる砂粒の量自体が少なければ、その情報量も少なくなる。一方、蛍光X線分析は、砂分の量や高温による鉱物の変化にあまり影響されることなく、胎土の材質を客観的な数値で示すことができる。

今回の分析に供された須恵器は、一般に、胎土中に粗粒の砂粒が多量に含まれるようなことはあまりなく、また焼成温度も1,000℃を超える高温のために、一部の鉱物については溶融やガラス化等が生じていることが多い。須恵器における胎土分析の方法としては、蛍光X線分析が用いられる事例が多く、本報

報告番号	分類		出土地点	層位	口径 (mm)	底径 (mm)	深高 (mm)	色調		胎土分類 (1, 2)	混入物 3)
	種類	器形						外面	内面		
4	須恵器	無台杯	O10B2	VI	108	64	31	灰白	灰黄	C	白・長
19	須恵器	有台杯	O11B10	IV	134		(44)	灰白	灰白	C +	白・黒
21	須恵器	有台杯	O10B	VI	118		(37)	灰	灰白	B +	白・長・黒
28	須恵器	有台杯	O11B5 P1102	覆土		78	(21)	灰	灰	B +	白・長・黒・雜
37	須恵器	有台杯	O10B17	V		46	(34)	灰	灰	A +	白
51	須恵器	杯蓋	O10B16	V	118		(17)	灰	灰	A +	白・長
52	須恵器	壺	O10B17	V			(23)	白灰	白灰	B +	白・長・黒
53	須恵器	盤	O10B15	VI	150	128	21	浅黄橙	浅黄橙	C	黒
57	須恵器	壺	O11A20	V	108		(77)	灰	灰白	A +	白・長
西1	須恵器	有台杯	西角地古窯跡	表採	124	76	54	青灰	青灰	A +	白・長
西2	須恵器	有台杯	西角地古窯跡	表採	103	66	39	暗青灰	青灰	A +	白・長
西3	須恵器	杯蓋	西角地古窯跡	表採	116		23	灰	灰	A +	白・長
西4	須恵器	長頸壺	西角地古窯跡	表採	84	(93)		灰	灰	A +	白
西5	須恵器	有台杯	西角地古窯跡	表採	94	66	36	青灰	青灰	B +	白・長
西6	須恵器	有台杯	西角地古窯跡	表採	108	72	32	暗青灰	暗青灰	B +	白・長
西7	須恵器	杯蓋	西角地古窯跡	表採	116	26	19	灰	灰	B +	白・長・石
西8	須恵器	壺	西角地古窯跡	表採	208		(97)	灰白	灰白	B +	白・長
西9	須恵器	有台杯	西角地古窯跡	表採	132	98	34	灰白	灰白	C +	白・長
西10	須恵器	無台杯	西角地古窯跡	表採	114	84	31	灰白	灰白	C +	白・長
西11	須恵器	杯蓋	西角地古窯跡	表採	120	24	22	灰白	灰白	C +	白・長
西12	須恵器	壺	西角地古窯跡	表採	150	104	28	灰	灰	C +	白・長

<注>

1) 肉眼観察による胎土分類基準

A類：混入物が少なく緻密で均質な胎土。壺面に焼き上げられ、灰色から青灰色を呈する。

B類：直径2mm以下の混入物が多い胎土。壺面に焼き上げられ、灰色を呈する。

C類：直径2mm以下の混入物が認められる胎土。焼成が不十分で、灰白色を呈し、粉っぽい。

2) 須沢角地遺跡・西角地古窯出土須恵器の特徴とされる「黒い吹き出し」の有無

+：黒い吹き出しが認められる資料

3) 混入物

白：白色砂子、長：長石、石：石英、黒：黒色砂子、雜：砂雜

第5表 分析試料一覧

# 1 須沢角地遺跡出土須恵器の胎土分析

溶融装置	リガク製卓上型高周波ビードサンブラ(3091A001)
融炉及び希釈率	融炉(LJ2B407) 5.000g : 試料 0.500g
制御器	LJ1
溶融温度 / 時間	1200℃ / 600sec

第 6 表 ガラスビード作成条件

ターゲット	Rb
管電圧 (KV)	50
管電流 (mA)	50
試料マスキ	30mm φ
試料スピン	ON
ダイヤフラム	30mm φ
測定雰囲気	真空

第 7 表 蛍光 X 線装置条件

測定元素	測定 スベクトル	1 次 フィルタ	アッチ ネータ	スリット	分光結晶	検出器	PMA		角度 (deg)			計測時間 (s)	
							LL	UL	Peak	+BG	-BG	Peak	BG
SiO <sub>2</sub>	Si-K α	OUT	OUT	S4	PET	PC	120	300	109.030	105.00	113.00	40	20
TiO <sub>2</sub>	Ti-K α	OUT	OUT	S2	LJF (200)	SC	80	340	86.140	84.50	88.50	60	60
Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	Al-K α	OUT	OUT	S4	PET	PC	110	300	144.770	138.00	-	40	20
Fe <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	Fe-K α	OUT	OUT	S2	LJF (200)	SC	90	320	57.494	55.50	60.00	40	20
MnO	Mn-K α	OUT	OUT	S2	LJF (200)	SC	90	20	62.966	62.00	63.68	60	20
MgO	Mg-K α	OUT	OUT	S4	RX25	PC	110	420	39.596	37.00-37.50 (0.10step)	41.50-42.50 (0.20step)	60	20
CaO	Ca-K α	OUT	OUT	S4	LJF (200)	PC	120	290	113.124	110.20	115.90	40	20
Na <sub>2</sub> O	Na-K α	OUT	OUT	S4	RX25	PC	120	300	48.134	45.90	50.30	60	20
K <sub>2</sub> O	K-K α	OUT	OUT	S4	LJF (200)	PC	120	280	136.674	-	142.00	40	20
P <sub>2</sub> O <sub>5</sub>	P-K α	OUT	OUT	S4	GE	PC	150	270	141.096	138.10	143.20	60	20
Rb	Rb-K α	OUT	OUT	S2	LJF (200)	SC	100	300	26.598	25.00-25.80 (0.10step)	27.06-27.14 (0.04step)	120	40
Sr	Sr-K α	OUT	OUT	S2	LJF (200)	SC	100	300	25.134	24.40-24.70 (0.10step)	25.60-25.80 (0.10step)	120	40
Y	Y-K α	OUT	OUT	S2	LJF (200)	SC	100	300	23.758	23.04-23.16 (0.06step)	24.30-24.50 (0.10step)	120	40
Zr	Zr-K α	OUT	OUT	S2	LJF (200)	SC	100	310	22.536	22.16	23.04	120	60
Ba	Ba-L α	OUT	OUT	S2	LJF (200)	SC	100	290	87.164	84.50	88.50	120	60

第 8 表 蛍光 X 線定量測定条件

尚も蛍光 X 線装置を用いた定量分析によって胎土の化学組成を求め、生産地と消費地の関係を探る資料としている。

本分析では、測定装置としてリガク製波長分散型蛍光 X 線分析装置 (ZSX Primus III+) を用い、ガラスビード法によって SiO<sub>2</sub>, TiO<sub>2</sub>, Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>, Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>, MnO, MgO, CaO, Na<sub>2</sub>O, K<sub>2</sub>O, P<sub>2</sub>O<sub>5</sub> の主要 10 元素と、Rb, Sr, Y, Zr, Ba の微量 5 元素について定量分析を実施した。なお、標準試料には独立行政法人産業技術総合研究所の地球化学標準試料 (JA-1, JA-2, JA-3, JB-1a, JB-2, JB-3, JCh-1, JF-1, JF-2, JG-1a, JG-2, JG-3, JGb-1, JGb-2, JH-1, JH-2, JH-3, JR-1, JR-2, JR-3, JSd-1, JSd-2, JSd-3, JSI-1, JSI-2, JSy-1) を用いた。以下に分析条件を記す。

## 1) 装 置

(株)リガク製 走査型蛍光 X 線分析装置 ZSX Primus III + (FP 定量法アプリケーション)

## 2) 試 料 作 成

ダイヤモンドカッターで切り出した破片を水洗した後、機械乾燥 (110℃) した試料を振動ミル (CMT 製 T1100 : 10ml 容量ステンカーバイト容器) で粉砕・混合し、ガラスビードを第 6 表の条件で作成した。

## 3) 測定条件

上記作成したガラスビードを専用ホルダーにセットし、上記した装置を用い、第7・8表の条件で測定を実施した。

## D 結果

蛍光X線分析による化学組成を第9表に示す。なお、測定成分の合計(Total)は、焼成不十分とされるC類が94.72～97.29%、C類を除く試料が97.24～99.07%であり、とくにC類で低い傾向が認められた。以下の結果解析では、試料の相互比較を行うために測定成分の合計を100%に規格化した化学組成(第9表)を用いている。また、試料間の化学組成を比較するにあたり、①胎土を構成する成分の中で主体をなす成分(SiO<sub>2</sub>, Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>)、②[井上2006]による滝寺古窯跡群、大貫古窯跡群における須恵器・土師器の調査において、分類に用いた成分(MgO, Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>)、③粘土の母材を考える上で重要な長石類(主にカリ長石、斜長石)の主要元素をなす成分(CaO, Na<sub>2</sub>O, K<sub>2</sub>O)、④須恵器の胎土分析において指標とされることが多い微量元素(Rb, Sr)という各成分を選択し、それらの値を縦軸・横軸とした散布図を用いた。なお、散布図は、生産地資料である西角地古窯跡の各試料の散布図(第9図)と、窯操業との関連性が推定される須沢角地遺跡試料を加えた散布図(第10図)を作成した。

1) SiO<sub>2</sub>, Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>

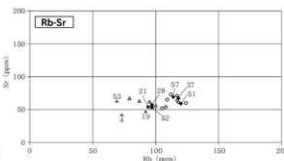
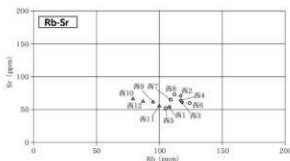
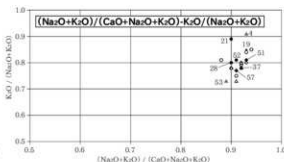
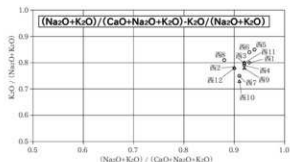
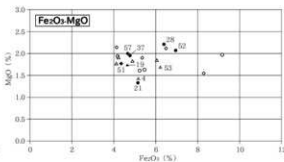
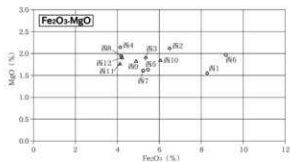
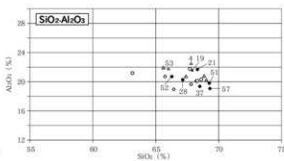
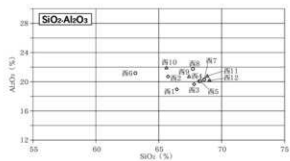
胎土を構成する成分の中で主体をなす成分(SiO<sub>2</sub>, Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>)についてみると、西角地古窯跡は、SiO<sub>2</sub>が63.14～69.02%、Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>が18.97～21.95%の領域に分布する。胎土分類に着目して見ると、分散が大きく、かつ重複するB+類とC+類の領域にA+類がややまとまって分布する。

遺跡名	調査番号	胎土分類	主要元素										微量元素				
			SiO <sub>2</sub> (%)	TiO <sub>2</sub> (%)	Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub> (%)	Fe <sub>2</sub> O <sub>3</sub> (%)	MnO(%)	MgO(%)	CaO(%)	Na <sub>2</sub> O(%)	K <sub>2</sub> O(%)	P <sub>2</sub> O <sub>5</sub> (%)	Rb(ppm)	Sr(ppm)	Y(ppm)	Zr(ppm)	Ba(ppm)
西角地古窯跡	西1	A+	66.44	0.75	18.97	8.29	0.03	1.55	0.27	0.68	2.80	0.11	108	54	23	202	613
	西2	A+	65.74	1.01	20.73	6.49	0.04	2.12	0.36	0.71	2.57	0.12	117	71	26	229	573
	西3	A+	67.81	0.78	19.66	5.35	0.04	1.90	0.34	0.79	3.10	0.13	118	61	25	193	668
	西4	A+	68.21	0.76	20.08	4.13	0.03	2.14	0.35	0.87	3.23	0.08	117	64	28	187	680
	西5	B+	68.30	0.91	20.12	5.46	0.07	1.63	0.20	0.46	2.68	0.06	105	52	22	225	480
	西6	B+	63.14	1.04	21.19	9.17	0.04	1.97	0.23	0.47	2.55	0.09	124	60	26	226	509
	西7	B+	68.61	0.86	20.31	5.23	0.03	1.61	0.30	0.71	2.18	0.07	109	65	29	232	547
	西8	B+	67.71	1.17	21.77	4.18	0.03	1.94	0.35	0.52	2.16	0.08	112	73	27	267	479
	西9	C+	67.40	0.87	20.75	4.89	0.03	1.83	0.33	0.80	2.81	0.19	95	62	26	216	646
	西10	C+	65.60	1.01	21.95	6.05	0.03	1.85	0.30	0.81	2.22	0.10	79	67	25	206	458
	西11	C+	68.84	0.97	20.81	4.12	0.03	1.77	0.27	0.61	2.40	0.08	100	56	28	244	527
	西12	C+	69.02	0.91	20.25	4.22	0.03	1.91	0.33	0.68	2.44	0.10	87	63	26	234	556
須沢角地遺跡	最大値		69.02	1.17	21.95	9.17	0.07	2.14	0.36	0.87	3.23	0.19	124	73	29	267	680
	最小値		63.14	0.75	18.97	4.12	0.03	1.55	0.20	0.46	2.16	0.06	79	52	22	187	458
	4	C	67.81	1.13	22.52	5.17	0.02	1.43	0.13	0.14	1.49	0.08	73	42	25	255	285
	19	C+	67.90	1.05	21.61	4.64	0.03	1.74	0.20	0.39	2.21	0.15	92	47	25	242	469
	21	B+	68.31	1.07	21.68	5.15	0.02	1.33	0.24	0.22	1.86	0.05	94	54	29	243	302
	28	B+	67.14	0.84	20.28	6.39	0.05	2.21	0.28	0.52	2.11	0.08	97	57	21	210	454
	37	A+	68.50	0.75	19.36	4.77	0.03	1.95	0.36	0.89	3.14	0.13	118	67	26	192	672
	51	A+	69.25	0.85	19.80	4.35	0.03	1.77	0.27	0.68	2.82	0.08	120	59	28	219	597
	52	B+	66.28	0.92	20.71	6.95	0.04	2.07	0.25	0.50	2.07	0.12	97	53	21	221	430
	53	C	66.01	0.96	21.81	6.22	0.03	1.69	0.32	0.67	1.84	0.36	69	63	30	258	440
	57	A+	69.30	0.86	19.08	4.66	0.03	2.00	0.35	0.81	2.70	0.10	114	69	23	215	636
	最大値		69.30	1.13	22.52	6.95	0.05	2.21	0.36	0.89	3.14	0.36	120	69	30	258	672
最小値		66.01	0.75	19.08	4.35	0.02	1.33	0.13	0.14	1.49	0.05	69	42	21	192	285	

第9表 蛍光X線分析結果



1 須沢角地遺跡出土須恵器の胎土分析



<胎土分類>  
西角地古窯跡  
○ : A+  
○ : B+  
△ : C+

<胎土分類>  
須沢角地遺跡  
○ : A+  
○ : B+  
△ : C+  
● : A+  
● : B+  
● : C+  
● : C

第9図 胎土化学組成散佈図  
(西角地古窯跡)

第10図 胎土化学組成散佈図  
(須沢角地遺跡・西角地古窯跡)

須沢角地遺跡は、 $\text{SiO}_2$  が 66.01 ~ 69.30%、 $\text{Al}_2\text{O}_3$  が 19.08 ~ 22.52% の領域に分布し、西角地古窯跡の領域と重なる。また、西角地古窯跡と同様に、A+ 類がややまとまって分布するが、若干  $\text{SiO}_2$  が多い傾向が見られる。

## 2) $\text{Fe}_2\text{O}_3$ , MgO

西角地古窯跡は、 $\text{Fe}_2\text{O}_3$  が 4.12 ~ 9.17%、MgO が 1.55 ~ 2.14% の領域に分布し、 $\text{Fe}_2\text{O}_3$  の分散が比較的大きいことを特徴とする。とくに、西角地古窯跡の西 1 (A+ 類) と西 6 (B+ 類) で  $\text{Fe}_2\text{O}_3$  が多く、分散する領域を大きくしている。

須沢角地遺跡は、 $\text{Fe}_2\text{O}_3$  が 4.35 ~ 6.95%、MgO が 1.33 ~ 2.21% の領域に分布し、西角地古窯跡の領域と重なる。A+ 類が  $\text{Fe}_2\text{O}_3$  の低濃度側にややまとまって分布し、21 (B+ 類) と 4 (C 類) が西角地古窯跡の MgO の領域下限 (1.5%) から、やや外れる。

## 3) CaO, $\text{Na}_2\text{O}$ , $\text{K}_2\text{O}$

ここでは、長石全体におけるアルカリ長石及びカリ長石の割合を定性的に検討する。散布図では、長石類全体におけるアルカリ長石の割合 ( $(\text{Na}_2\text{O}+\text{K}_2\text{O}) / (\text{CaO}+\text{Na}_2\text{O}+\text{K}_2\text{O})$ ) を横軸とし、アルカリ長石におけるカリ長石の割合 ( $\text{K}_2\text{O} / (\text{Na}_2\text{O}+\text{K}_2\text{O})$ ) を縦軸としている。

西角地古窯跡は、 $(\text{Na}_2\text{O}+\text{K}_2\text{O}) / (\text{CaO}+\text{Na}_2\text{O}+\text{K}_2\text{O})$  では B+ 類が 0.88 ~ 0.94、A+ 類と C+ 類が 0.90 ~ 0.93、 $\text{K}_2\text{O} / (\text{Na}_2\text{O}+\text{K}_2\text{O})$  では B+ 類が 0.75 ~ 0.85、A+ 類と C+ 類が 0.73 ~ 0.80 の領域に分布し、比較的大く分散する B+ 類の中に A+ 類・C+ 類がまとまって分布する。

須沢角地遺跡は、 $(\text{Na}_2\text{O}+\text{K}_2\text{O}) / (\text{CaO}+\text{Na}_2\text{O}+\text{K}_2\text{O})$  が 0.89 ~ 0.93、 $\text{K}_2\text{O} / (\text{Na}_2\text{O}+\text{K}_2\text{O})$  が 0.73 ~ 0.91 の領域に分布する。西角地古窯跡の領域とほぼ重なるが、21 (B+ 類) と 4 (C 類) は西角地古窯跡の  $\text{K}_2\text{O} / (\text{Na}_2\text{O}+\text{K}_2\text{O})$  の領域上限 (0.85) を超えたところに分布する。

## 4) Rb, Sr

Rb, Sr は須恵器の胎土分析において指標とされることが多く、[三辻 1983] が地域特性因子として重要視している元素である。なお、両元素が須恵器の地域差を表す理由として、[三辻 2008] は、「花崗岩類が K-Ca, Rb-Sr の両分布図上で地域差を表すということは花崗岩類の地域差を支配しているのはカリ長石と斜長石であることを意味する。さらに花崗岩類を後背地とする窯跡出土須恵器の化学特性が花崗岩類の化学特性とよく対応するところから、須恵器の素材粘土は後背地の花崗岩類が風化して生成した残留粘土であることを示している」ことが背景にあると捉えている。

西角地古窯跡は、Rb は C+ 類が 79 ~ 100ppm、A+ 類と B+ 類が 105 ~ 124ppm、Sr は C+ 類が 56 ~ 67ppm、A+ 類と C+ 類が 52 ~ 73ppm の領域に分布する。

須沢角地遺跡は、Rb が 69 ~ 120ppm、Sr が 42 ~ 69ppm の領域に分布し、西角地古窯跡の領域と重なる。A+ 類が Rb の高濃度側にややまとまって分布するほか、西角地古窯跡の特徴とされる黒い吹き出しが認められない 4・5 (C 類) が西角地古窯跡の分布領域から、やや低濃度側に外れる。

## E 考 察

### 1) 西角地古窯跡の化学組成と胎土分類

西角地古窯跡から採取された須恵器は、肉眼観察による混入物、焼成の程度及び色調、さらに黒い吹き出しが認められるという特徴により、A+・B+・C+の3種類の胎土に分類されている。

西角地古窯跡資料の化学組成(第9図)は、 $\text{Fe}_2\text{O}_3\text{-MgO}$  散布図では不明瞭であるが、他の散布図では比較的特定の領域にまとまって分布する。詳細にみると、混入物が少なく均質な胎土とされるA+類に対して、混入物が多いとされるB+類で分散が大きい傾向にある。また、C+類は、 $\text{SiO}_2\text{-Al}_2\text{O}_3$  散布図、 $(\text{Na}_2\text{O}+\text{K}_2\text{O}) / (\text{CaO}+\text{Na}_2\text{O}+\text{K}_2\text{O}) \cdot \text{K}_2\text{O} / (\text{Na}_2\text{O}+\text{K}_2\text{O})$  散布図において比較的まとまった分布を示し、Rb-Sr 散布図においてはRbの100ppm付近を境として低濃度側の領域に偏って分布する。

以上の状況から、西角地古窯跡試料は、いずれの胎土分類も化学組成においては領域が重複することが指摘できる。さらに、Rb-Sr 散布図を指標とすると、Rbのおよそ100ppm付近を境として、高濃度側の領域にA+・B+類、低濃度側にC+類が分布しており、A+・B+類とC+類との間で特定の分布領域が示唆できる可能性がある。

### 2) 須沢角地遺跡出土須恵器について

次に須沢角地遺跡の須恵器は、西角地古窯跡と同様の基準による胎土分類により、A+・B+・C+類と、黒い吹き出しが認められないC類の4種類から構成される。

A+類(37・51・57)は、 $\text{SiO}_2\text{-Al}_2\text{O}_3$  散布図では西角地古窯跡資料のA+類より $\text{SiO}_2$ がやや多い傾向にあるが、その他の散布図においては西角地古窯跡資料の領域に取まる。なお、A+類は、各散布図において分散が小さく、まとまって分布する傾向から、西角地古窯跡資料のA+類と同じと見て良いと考えられる。

B+類(21・28・52)は、 $\text{SiO}_2\text{-Al}_2\text{O}_3$  及びRb-Sr 散布図ではいずれも西角地古窯跡資料の領域に取まる一方、 $(\text{Na}_2\text{O}+\text{K}_2\text{O}) / (\text{CaO}+\text{Na}_2\text{O}+\text{K}_2\text{O}) \cdot \text{K}_2\text{O} / (\text{Na}_2\text{O}+\text{K}_2\text{O})$  散布図においては21がやや西角地古窯跡資料の領域から外れ、 $\text{Fe}_2\text{O}_3\text{-MgO}$  散布図においてもMgOがやや少ない傾向が認められる。なお、後述するC類の4も類似した傾向を示しており、さらに両者に共通する特徴としてBa濃度が約300ppmと西角地古窯跡資料の濃度範囲(458～680ppm)より低値であることも指摘できる。また、B+類のRb濃度は94～97ppmと西角地古窯跡資料のB+類のRb濃度(105～124ppm)と比べて低いという特徴を示す。B類(B+類)は、胎土の特徴として、混入物が多いという点が挙げられており、これらの混入物の多寡が化学組成に影響している、すなわち分散を大きくしている可能性が考えられる。

C類(4, 53)及びC+類(19)は、 $\text{SiO}_2\text{-Al}_2\text{O}_3$  散布図では西角地古窯跡資料の分布領域に概ね取まる。C類とC+類の違いは $\text{SiO}_2\text{-Al}_2\text{O}_3$  散布図のほか、 $\text{Fe}_2\text{O}_3\text{-MgO}$  散布図、 $(\text{Na}_2\text{O}+\text{K}_2\text{O}) / (\text{CaO}+\text{Na}_2\text{O}+\text{K}_2\text{O}) \cdot \text{K}_2\text{O} / (\text{Na}_2\text{O}+\text{K}_2\text{O})$  散布図では不明瞭であるが、Rb-Sr 散布図では西角地古窯跡の特徴を有する19(C+類)が西角地古窯跡資料の領域に、4・53(C類)は西角地古窯跡資料の領域より離れた位置に分布する。なお、4(C類)は、前述したようにB+類の21と同様に、 $(\text{Na}_2\text{O}+\text{K}_2\text{O}) / (\text{CaO}+\text{Na}_2\text{O}+\text{K}_2\text{O}) \cdot \text{K}_2\text{O} / (\text{Na}_2\text{O}+\text{K}_2\text{O})$  散布図において西角地古窯跡資料の領域からやや離れ、MgOがやや少ない傾向とBa濃度が低い特徴とが認められる資料である。

以上の状況から、須沢角地遺跡出土資料のうち西角地古窯跡資料の特徴とされる黒い吹き出しが認めら

れる A+ 類, B+ 類, C+ 類は, Rb-Sr 散布図を用いて西角地古窯跡資料の分布領域と照合することによって西角地古窯跡産の可能性が高いと評価される。一方, C 類 (4・53) については西角地古窯跡資料の領域から外れることより, 同窯跡産のものとはやや異質である可能性が示唆される。また, B+ 類の 21 は Rb-Sr 散布図においては西角地古窯跡産の可能性が評価される一方で, C 類の 4 と類似した特徴を有する。さらに, C 類でも 4 と 53 とでは特徴が異なり, とくに  $(\text{Na}_2\text{O}+\text{K}_2\text{O}) / (\text{CaO}+\text{Na}_2\text{O}+\text{K}_2\text{O}) \cdot \text{K}_2\text{O} / (\text{Na}_2\text{O}+\text{K}_2\text{O})$  散布図における位置関係においてその違いが看取される。

## F さ い ご に

今回の須沢角地遺跡と西角地古窯跡の須恵器から得られた化学成分の比較対照では, A+ 類は比較的まとまった分布を示すのに対し, B+ 類, C+ 類ではやや分散するという傾向が認められた。また, 実体顕微鏡を用いた表面観察の結果, B 類, C 類には岩片が散在するという特徴により, A 類との差異が認められた。これは須恵器の胎土分類で指摘された混入物の程度の違いを支持する状況と言える。なお, 砂サイズの岩片の岩種特定は実体顕微鏡観察では難しく詳細な検討には至らなかったが, これを補う方法として薄片観察が挙げられる。この手法では, 上述したように胎土の素土を構成する粘土の基質の特徴及び砂(岩石片, 鉱物片)等の碎屑物の特徴や量比を明らかとできることから, 今後肉眼による混入物等の表面観察と併せた検討により, 上述した B 類や C 類の特性が明らかになると期待される。また, 化学組成の比較からやや異質とされた C 類 (4, 53) についても, 西角地古窯跡の須恵器胎土の特性を示している可能性も考えられるため, 今後同様の特徴を有する生産地資料との比較調査が望まれる。

## 引用文献

- 井上 巖 2006 胎土分析, 新潟県埋蔵文化財調査報告書 第 149 集, 上信越自動車道関係発掘調査報告書 XVI 滝寺古窯跡群 大貫古窯跡群, 新潟県教育委員会, 78-88.
- 三辻利一 1983 古代土器の産地推定法, ニュー・サイエンス社, 80p.
- 三辻利一・小野裕子・天野哲也 2008 オホーツク文化の集団間・対外交流の研究-1. 礼文島香深井 1 遺跡出土陶質土器の蛍光 X 線分析-, 北海道大学総合博物館研究報告 第 4 号, 北海道大学総合博物館, 139-152.
- 鈴木郁夫 1983 1 地形分類図, 新潟県上越地域土地分類基本調査 糸魚川, 新潟県農地部農村総合整備課, 9-22.

## 第七章 ま と め

### 1 遺構・遺物から見た本調査区の位置づけ

今回の調査区は、北陸新幹線の高架下の市道取付に伴うもので、調査面積 268m<sup>2</sup> (長さ 14.5m × 幅 4.6m × 4面) である。調査面積が狭く不明な部分も多いが、これまでの調査成果を過去の調査成果に照らし合わせ、須沢角地遺跡内での位置づけを行う。

#### A 古 代

**遺 構** 土坑 1 基、ピット 11 基、性格不明遺構 3 基を検出した。土坑は壁際で確認されたもので調査区外に延びるため、全容は不明であった。ピットは 11 基検出されたが、柱根痕などは見られず、柱穴と認められなかった。また、それぞれピット間の関連性も認められなかった。性格不明遺構は 2009 年度調査で樹痕と推定されている。本調査でも検出されたが、平面形・断面形から樹痕と推定される。これらの性格不明遺構の検出はⅦ層上面(古代下層遺構検出面)であったが、遺物は覆土最上層にⅤ層からの粉れ込みと推定される土器片が少量しか出土せず、覆土も砂質シルトの純層で洪水堆積層と推定した。これらの状況から古代の須沢角地遺跡が成立する以前の樹痕と判断できる。

一方、過去の調査成果に照らし合わせれば、本調査区の東に隣接する 8 区(2009 年度調査)では、古代上層(Ⅵ層上面)で掘立柱建物 3 棟、竪穴建物 2 棟、畑作溝 1 か所、ピット 42 基、古代下層(Ⅶ層上面)で掘立柱建物 1 棟、竪穴建物 1 棟、ピット 8 基を検出し、本調査区の西 20m の 7 区(2007 年度調査)では土坑 6 基、溝状遺構 10 基、性格不明遺構 2 基、柱穴 46 基を検出した。

これらの遺構の年代は、伴出遺物が〔春日 1999〕のⅣ 2・3 期からⅤ期のもので占められることから、本調査区は〔春日 1999〕のⅣ 2・3 期からⅤ期の集落内に含まれることになる。したがって、集落内の遺構が希薄の部分を検出したものと考えられる。

**遺 物** 土器、石器、鉄製品、鉄滓、羽口などが出土した。調査面積が狭い割には、土器は細片ではあるものの比較的多く出土した。出土層位はⅤ層で 53%、Ⅵ層で 28%と、古代の遺物包含層で大半を占める。その 8 割以上が須恵器で占められる。これらの須恵器の無台杯、有台杯の多くは、小ぶりて底部から急に直線状に立ち上がる特徴を呈する。いわゆる小型で箱状の器形であり〔春日 1999〕のⅣ 2・3 期に所属する。また、8 世紀末から 9 世紀初頭に位置づけられる西角地古窯跡産の須恵器と、本発掘調査出土の須恵器の胎土分析結果から、本調査で出土した須恵器の多くは同窯跡産と判明したことから真づけられる。一方、無台杯の底部の切り離しが回転糸切りのもの(12・13)、佐渡小泊産無台杯(14～16)はⅤ期の所産と推定される。また、須恵器有台杯の大型品で胎土が粘土質で均質(24)、シルト質で均質(25)は高田平野の東部及び西産と推定され、Ⅲ期頃と推定される。須恵器杯蓋も端部が長めに垂下し、しっかりと面取りされるもの(41・49)はⅢ期まで遡る可能性がある。しかし、出土した多くの須恵器は〔春日 1999〕のⅣ 2・3 期に所属するであろう。

したがって、土器のほとんどがⅢ期からⅤ期に含まれるものの、主体は〔春日 1999〕Ⅳ 2・3 期であり、一部Ⅴ期の土器もあるものと思われる。

この結果を過去の調査成果に照らせば、本調査区の東に隣接する 8 区 (2009 年度調査)、本調査区の西 20m の 7 区 (2007 年度調査) でも、[春日 1999] の IV 2・3 期を主体に V 期に所属する土器が出土している [加藤 2011] ことから、隣接調査区と同じ傾向である。

## B 中 世

**遺 構** 2009 年度の調査結果から III 層を中世後期の、IV 層中世前期の遺物包含層としてとらえ、それぞれ IV 層上面 (III 層の遺構検出面)、V 層上面 (IV 層の遺構検出面) で遺構検出を試みた。両検出面とも遺構は認められなかったが、ほぼ平坦な地形であることが認められた。過去の調査では約 200m 離れた旧青海町教委調査区 (1987 年度調査)、糸魚川市教委 (2007 年度調査) では、掘立柱建物や土坑などが検出され、14～15 世紀または 12～14 世紀の集落とされた。県教委の調査 (2009 年度) では本調査区から約 50m 離れた 9 区では、III 層と V 層に挟まれた水田 3 区画が検出された。このような状況から本調査区の中世は、集落から離れた生産域と考えられる。

**遺 物** 珠洲焼、瀬戸美濃焼、石器がごく少量出土した。上記のように集落から離れ、生産域と推定されることの反映かと思われる。

## 要 約

- 1 須沢角地遺跡は、新潟県糸魚川市須沢字大坪 2,672 番 2 ほか に所在する。
- 2 調査は北陸新幹線建設による市道取付に伴い、2014 年度に実施した。調査面積は 268 m<sup>2</sup> である。
- 3 遺跡は、姫川左岸の扇状地西端に立地し、古代の遺構検出面の標高は 5.9m である。
- 4 調査の結果、縄文時代、古代、中世の遺構・遺物を検出した。主体は古代の遺構・遺物である。
- 5 縄文時代は石器がごく少量出土した。遺構は検出されなかった。
- 6 古代の遺構は土坑 1 基、ピット 11 基、性格不明遺構 3 基である。過去の調査区に照らし合わせれば、古代集落の範囲内の比較的遺構の希薄な部分を調査したものと考えられる。なお、性格不明遺構は検出面や覆土、形状から樹痕と考えられ、古代集落の成立以前の形成と判断できる。
- 7 古代の遺物は、調査面積が狭い割には多く出土している。8 世紀から 10 世紀ころまで認められるが、8 世紀末葉から 9 世紀初頭が主体である。この時期の須恵器には、焼歪みの著しいものや溶着痕のあるものが認められ、胎土の肉眼観察から多くは調査区の西 500m に存在する西角地古窯跡産と考えられた。両遺跡の須恵器の胎土分析を行った結果、多くの須恵器が西角地古窯跡から搬入されていることが明らかになった。
- 8 本遺跡は、かつて北陸道「湊海駅」の有力な候補地とされたが、「駅」の存在を裏づける資料が存在せず、駅を支えた青海地域最大の古代集落 [加藤 2011] と評価されている。本調査の結果もこの評価を超えるものではなかった。
- 9 中世の遺物は、珠洲焼、瀬戸美濃焼、石器が散漫に少量出土した。遺構は検出されなかった。周辺に水田が検出されていることから、集落から比較的離れた生産域と考えられる。

## 引用・参考文献

- 相羽重徳<sup>29)</sup> 2002 『北陸新幹線関係発掘調査報告書Ⅰ 寺地遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第113集 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 青木重孝編集 1966 『青海—その生活と発展—』新潟県青海町役場
- 青木重孝監修 1976 『糸魚川市史1』新潟県糸魚川市役所
- 池野正男 1987 「射水丘陵における8世紀後半の須恵器窯跡」『大境』第11号 富山県考古学会
- 池野正男 2011 「須恵器技法における糸切り技法の導入とその技術的系譜」『大境』第29号 富山県考古学会
- 今村 克・山岸洋一 2008 「須沢角地遺跡」糸魚川市文化財調査報告書 糸魚川市教育委員会
- 宇野隆夫<sup>30)</sup> 1989 『富山大学考古学研究报告第3冊 越中上末窯』富山大学人文学部考古学研究室
- 小田由美子 2006 『上信越自動車道関係発掘調査報告書XVI 滝寺古窯跡群・大貫古窯跡群』新潟県埋蔵文化財調査報告書第149集 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 春日真実 1998 「西頸城地域における古代の土器様相」『研究紀要』2 財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 春日真実 1999 「第4章 古代 第2節 土器編年と地域性」『新潟県の考古学』新潟県考古学会
- 春日真実 2001 『国道116号埋蔵文化財発掘調査報告書 梯子谷窯跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第104集 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 春日真実 2007 「越後における古代の煮炊具について」『新潟考古』新潟県考古学会
- 春日真実 2010 「山岸遺跡—北条一門の名越氏関連の館か—」『第17回遺跡発掘調査報告会』財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 春日真実 2010 「貞観五年の地震痕跡再考」『三面川流域の考古学』第8号 奥三面を考える会
- 加藤 学 1999 「第V章 上層の調査 1 遺構」『上信越自動車道関係発掘調査報告書V 和泉A遺跡(本文・観察表編)』新潟県埋蔵文化財調査報告書第93集 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 加藤 学<sup>31)</sup> 2006 『北陸新幹線関係発掘調査報告書V 大角地遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第173集 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 加藤 学<sup>32)</sup> 2008 『北陸新幹線関係発掘調査報告書VII 姫御前遺跡1』新潟県埋蔵文化財調査報告書第184集 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 加藤 学 2011 『北陸新幹線関係発掘調査報告書XIV 須沢角地遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第225集 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 金箱文夫 1984 「近世の釘」『物質文化』43 物質文化研究会
- 金子拓男 1975 「新潟県青海町天神山経塚出土の陶製経筒と珠洲焼の成立について」『信濃』27-1 信濃史学会
- 木島 勉 1989 『立ノ内遺跡・山崎三十三塚』糸魚川市埋蔵文化財調査報告書16 新潟県糸魚川市教育委員会
- 木島 勉 2007 「山崎A・B遺跡」『第14回遺跡発掘調査報告会資料』財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 北野博司 1988 「第4章第3節(1)古代の土器」『辰口西部丘陵遺跡群1』石川県立埋蔵文化財センター
- 小池勝典・白井雅明 2012 『一般国道8号糸魚川地区橋梁架替関係発掘調査報告書 宮花町遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第239集 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 小島幸雄<sup>33)</sup> 1983 「末野古窯跡群」『新潟県文化財調査年報第22 保合川流域』新潟県教育委員会
- 佐藤俊幸・田海義正<sup>34)</sup> 1991 『加賀街道・松本街道』新潟県歴史の道調査報告書第一集 新潟県教育委員会
- 鈴木郁夫 1983 「I 地形分類Ⅰ 地形概説」『新潟県上越地域土地分類基本調査 糸魚川』新潟県農地総合整備課
- 鈴木郁夫 2000 「I 概説 1.地形概説」『新潟県地質図説明書[2000年度版]』新潟県商工労働部商工振興課
- 鈴木俊成<sup>35)</sup> 1988 『北陸自動車道糸魚川地区発掘調査報告書V 小出越遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第51集 新潟県教育委員会

- 千家和比古<sup>11)</sup> 1979 「第5章 西角地古窯跡」『大角地遺跡—飾玉とヒスイの工房址—』新潟県青海町教育委員会
- 高橋 保 1988 『北陸自動車道糸魚川地区発掘調査報告書Ⅲ 立ノ内遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第49集 新潟県教育委員会
- 辻 範朗 2006 「北陸新幹線関係 須沢角地遺跡」『新潟県埋蔵文化財調査事業団年報 平成16年度』財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 土田孝雄・小池義人<sup>12)</sup> 1988 『須沢角地 A 遺跡発掘調査報告書』新潟県青海町教育委員会
- 土田孝雄<sup>13)</sup> 1991 「松本街道」『加賀街道・松本街道』新潟県歴史の道調査報告書第一集 新潟県教育委員会
- 寺崎裕助<sup>14)</sup> 1988 『北陸自動車道糸魚川地区発掘調査報告書Ⅳ 原山遺跡・大塚遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第50集 新潟県教育委員会
- 寺村光晴・安藤文一<sup>15)</sup> 1979 『大角地遺跡—飾玉とヒスイの工房址—』新潟県青海町教育委員会
- 新潟県教育庁文化行政課 2014 『新潟県の文化財一覧』新潟県教育委員会
- 平野団三・渡辺秀雄 1968 「西頸城郡」『日本歴史地名体系 15 新潟県の地名』平凡社
- 山岸洋一・田村公一 2004 『水穂寺跡発掘調査報告書』糸魚川市埋蔵文化財調査報告書47 新潟県糸魚川市教育委員会
- 吉岡康暢 1994 『中世須恵器の研究』吉川弘文館
- 米沢 康 1980 「大宝二年の越中国四部分割をめぐって」『信濃』第32巻6号 信濃史学会
- 渡邊裕之<sup>16)</sup> 2010 『一般国道116号和島バイパス関係発掘調査報告書Ⅲ 立野大谷製鉄遺跡・姥ヶ入製鉄遺跡・姥ヶ入南遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第208集 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団



観察表

土器・陶器観察表

( ) 内数字は層存地、または鑑定試  
 類 1・1は黒色吹き出し物あり  
 器人物：白・白色粘土、黒・黒石、G・石灰、黒・黒色色石、黄・黄砂、赤・赤色面付

報告番号	分類	器種	出土地点	部位	口径(mm)	底径(mm)	高さ(mm)	色調		胎土	器人物	製作法		使用痕跡	備考
								外面	内面			外面	内面		
1	底磁器	無釉鉢	O1A20	V	130	(325)	黒	黒	白	C	白・黒石	ロクロナデ	ロクロナデ	口縁部入土付	内外面口縁部黒化。
2	底磁器	無釉鉢	O1A20	V	(122)	(88)	31	黄灰	黒	B+	白・黒	ロクロナデ→回転ヘラ型可	ロクロナデ		内外面口縁部黒化。
3	底磁器	無釉鉢	O10A17	V	118	86	30	灰	明色黄灰	C+	白・黒	ロクロナデ→回転ヘラ型可	ロクロナデ		内外面口縁部黒化。
4	底磁器	無釉鉢	O10E2	VI	108	64	31	灰白	灰黒	C	白・黒	ロクロナデ→回転ヘラ型可	ロクロナデ		
5	底磁器	無釉鉢	O10E2	VI	98	(21)	灰白	灰白	B+	白・黒	ロクロナデ→回転ヘラ型可	ロクロナデ			
6	底磁器	無釉鉢	O11B15	V	90	(23)	灰白	灰白	C	白・石	ロクロナデ→回転ヘラ型可	ロクロナデ		底面黒化	
7	底磁器	無釉鉢	O11B2	V	82	(16)	灰白	灰白	C+	白・黒	ロクロナデ→回転ヘラ型可	ロクロナデ		底面黒化	
8	底磁器	無釉鉢	O10A16	V	90	(14)	灰白	灰黒	C	白・黒	ロクロナデ→回転ヘラ型可	ロクロナデ		底面黒化	
9	底磁器	無釉鉢	O11B10	IV	70	(17)	灰白	灰	C	白・黒	ロクロナデ→回転ヘラ型可	ロクロナデ		内面黒化	
10	底磁器	無釉鉢	O11B15	V	87	(16)	灰白	灰白	C	白・黒	ロクロナデ→回転ヘラ型可	ロクロナデ		内面・底面黒化	
11	底磁器	無釉鉢	O11B	V	74	(23)	灰白	灰白	B+	白・黒石	ロクロナデ→回転ヘラ型可	ロクロナデ			
12	底磁器	無釉鉢	O10B16	IV	76	(18)	灰白	灰	D	白・黒	ロクロナデ→回転ヘラ型可	ロクロナデ		底面黒化	
13	底磁器	無釉鉢	O10B15	IV	64	(27)	灰	灰	D	白	ロクロナデ→回転ヘラ型可	ロクロナデ		内外面入土付	
14	底磁器	無釉鉢	O10B16	V・VI	122	82	33	灰	灰	D+	白	ロクロナデ→回転ヘラ型可	ロクロナデ		内外面入土付
15	底磁器	無釉鉢	O10B11	IV	86	(15)	灰	灰白	D	白	ロクロナデ→回転ヘラ型可	ロクロナデ		内面・底面黒化	
16	底磁器	無釉鉢	O1A20	V	86	(13)	灰白	灰白	D	白	ロクロナデ→回転ヘラ型可	ロクロナデ		内面黒化	
17	底磁器	有釉鉢	O10B17	V	(150)	(85)	44	灰	灰白	B+	白・黒石	ロクロナデ→回転ヘラ型可→高台製付	ロクロナデ		外面タタキ付あり。
18	底磁器	有釉鉢	O11B15 No.2	V	114	76	38	灰	灰	A+	白・黒	ロクロナデ→回転ヘラ型可→高台製付	ロクロナデ		高台と杯部の胎土著しく異なる。外面杯部→口縁部黒化。
19	底磁器	有釉鉢	O11B10	IV	134	(44)	灰白	灰白	C+	白・黒	ロクロナデ	ロクロナデ		底面黒化	
20	底磁器	有釉鉢	O11B20	V	130	(28)	灰	灰	B+	白・黒石	ロクロナデ	ロクロナデ		外面黒化。	
21	底磁器	有釉鉢	O10B	VI	118	(37)	灰	灰白	B+	白・黒	ロクロナデ	ロクロナデ		外面黒化。	
22	底磁器	有釉鉢	O10B1	VI	118	(29)	黄灰	灰	A	白・黒	ロクロナデ	ロクロナデ		外面黒化。	
23	底磁器	有釉鉢	O10B1	VI	(108)	(35)	灰	灰	A+	白・黒石	ロクロナデ→回転ヘラ型可	ロクロナデ		外面黒化。	
24	底磁器	有釉鉢	O10B6	IV	94	(15)	灰	灰白	D	白・黒石	ロクロナデ→回転ヘラ型可→高台製付	ロクロナデ		内面・底面黒化	
25	底磁器	有釉鉢	O10A21	VI	86	(22)	灰白	灰	D	白	ロクロナデ→回転ヘラ型可→ロクロ型可→高台製付	ロクロナデ		内面・底面黒化	
26	底磁器	有釉鉢	O10A16	V	86	(35)	灰白	灰白	D	白・黒	ロクロナデ→回転ヘラ型可→高台製付	ロクロナデ		内面・底面黒化	
27	底磁器	有釉鉢	O11A25	VI	96	(21)	黄砂	灰白	C	白・黒石	ロクロナデ→回転ヘラ型可→高台製付	ロクロナデ			
28	底磁器	有釉鉢	O11B20 P1102	層土	78	(21)	灰	灰	B+	白・黒	ロクロナデ→回転ヘラ型可→高台製付	ロクロナデ			
29	底磁器	有釉鉢	O11B20 No.2 O10B16	V・V	79	(35)	灰白	灰白	D	白・黒石	ロクロナデ→回転ヘラ型可→高台製付	ロクロナデ		内面・底面黒化	
30	底磁器	有釉鉢	O10A21 O11B O10B6	V・V・VI	76	(20)	灰	灰白	B+	白・黒石	ロクロナデ→回転ヘラ型可→高台製付	ロクロナデ		内面・底面黒化	
31	底磁器	有釉鉢	O11B10	VI	(82)	(23)	黄灰	灰黒	C+	白・黒	ロクロナデ→回転ヘラ型可→高台製付	ロクロナデ		底面黒化	
32	底磁器	有釉鉢	O11B15	IV	70	(23)	灰	灰	B+	白・黒石	ロクロナデ→回転ヘラ型可→高台製付	ロクロナデ		底面黒化	
33	底磁器	有釉鉢	O11B5	VI	62	(12)	灰白	灰白	C	白・黒石	ロクロナデ→回転ヘラ型可→高台製付	ロクロナデ		内面黒化	
34	底磁器	有釉鉢	O10B1	VI	56	(12)	灰白	灰白	C	白・黒石	ロクロナデ→回転ヘラ型可→高台製付	ロクロナデ		内面黒化	
35	底磁器	有釉鉢	O10B11	IV	60	(22)	灰	灰	B+	白・黒	ロクロナデ→回転ヘラ型可→高台製付	ロクロナデ		底面黒化	
36	底磁器	有釉鉢	O10E7	VI	64	(14)	灰白	灰白	B+	白・黒石	ロクロナデ→回転ヘラ型可→高台製付	ロクロナデ		底面黒化	
37	底磁器	有釉鉢	O10B17	V	46	(24)	灰	灰	A+	白	ロクロナデ→回転ヘラ型可→高台製付	ロクロナデ		外面黒化。	
38	底磁器	高杯	O10A21 No.1	V	120	(46)	黄砂	黄灰	D	白・黒石	ロクロナデ→回転ヘラ型可→高台製付	ロクロナデ		口縁部入土付	
39	底磁器	杯蓋	不明					灰	灰	A	白	ロクロナデ		底径約 22mm	

観測番号	分類	種別	図形	出土地点	群位	口径 (mm)	底径 (mm)	高さ (mm)	色調		加工	混入物	胎作跡跡		使用痕跡	備 考
									外面	内面			外面	内面		
40	灰部形	杯蓋	010A16 010A22	V・VI	100		(20)	灰	灰白	D	白・長・石・ 黒	ロクロナデ→回転へ タタキ	ロクロナデ	胎座に入 付着	胎座の裏面、胎土はシル ト質で均質。外面半肉状 に灰化。	
41	灰部形	杯蓋	010A22	VI	107		(15)	黄灰	灰白	D	長・黒	ロクロナデ	ロクロナデ		胎土はシル ト質で均質。外面灰 化。	
42	灰部形	杯蓋	010B6	IV	152		(14)	灰白	灰白	C+	白・長・黒	ロクロナデ	ロクロナデ		胎土不十分。	
43	灰部形	杯蓋	010B17	V	(145)		(16)	暗赤子 →灰	暗赤子 →灰	C+	白・長・石 ・黒	ロクロナデ→回転へ タタキ	ロクロナデ			
44	灰部形	杯蓋	011A20	V	(148)		(12)	灰	灰	B+	白・長・黒	ロクロナデ	ロクロナデ		外面白線部灰化。	
45	灰部形	杯蓋	010B16	V	(139)		(23)	灰	灰	B+	白・長・黒	ロクロナデ→回転へ タタキ→ロクロナデ	ロクロナデ		外面白線部灰化。	
46	灰部形	杯蓋	010B17	VI	128		(17)	灰	灰	A	白・長・石 ・黒	ロクロナデ	ロクロナデ		外面白線部灰化。内面灰 化。	
47	灰部形	杯蓋	010B17	V	(120)		(14)	灰白	灰白	C+	白・長・黒	ロクロナデ→回転へ タタキ→ロクロナデ	ロクロナデ		胎土不十分。取っばい。	
48	灰部形	杯蓋	010B17	V	122		(12)	緑灰	緑灰	C+	白・長・黒	ロクロナデ→回転へ タタキ	ロクロナデ		外面白線部灰化。	
49	灰部形	杯蓋	010B22	VI	(120)		(14)	灰	灰	D	白・黒	ロクロナデ	ロクロナデ		胎土はシルト質で均質。	
50	灰部形	杯蓋	011A25	V	122		(22)	灰	灰	B+	白・長・石 ・黒	ロクロナデ→回転へ タタキ→ロクロナデ	ロクロナデ		外面白線部灰化。	
51	灰部形	杯蓋	010B16	V	118		(17)	灰	灰	A+	白・長	ロクロナデ→回転へ タタキ→ロクロナデ	ロクロナデ		外面白線部灰化。	
52	灰部形	蓋	010B17	V			(23)	白灰	白灰	B+	白・長・黒	ロクロナデ	ロクロナデ		縁部肉厚 80mm。黒 色の吹き出し痕跡。	
53	灰部形	蓋	010B16	VI	150	128	21	浅黄緑	浅黄緑	C	黒	ロクロナデ	ロクロナデ		胎土不十分。取っばい。	
54	灰部形	蓋	010B1	IV	80		(23)	緑灰	緑灰	A+	白・長・石 ・黒	ロクロナデ	ロクロナデ		外面灰化。内面灰化。	
55	灰部形	蓋	010A16	IV	88		(22)	暗灰	暗灰	A	白・長	ロクロナデ	ロクロナデ		外面灰化。	
56	灰部形	蓋	011B20	IV	122		(26)	灰	灰	A+	白・黒	ロクロナデ	ロクロナデ		外面白線部灰化。内面白線 部灰化。	
57	灰部形	蓋	011A20	V	108		(77)	灰	灰白	A+	白・長	ロクロナデ	ロクロナデ		胎土は砂質で均質。	
58	灰部形	碗状	011A20	IV				灰	灰	D	白・長・石 ・黒	平行タタキ→カキメ	青濁灰アケ具 →カキメ		胎土はシルト質で均質。 外面灰化。	
59	灰部形	蓋	010A21	V	(164)		(47)	灰	灰	B+	白・長・黒 ・石	白線：ロクロナデ。 胎：平行タタキ	白線：ロクロ ナデ。胎：青 濁灰アケ具		内外面白線部灰化。	
60	灰部形	蓋	010B1	V				灰	灰	B	白・長	ロクロナデ→縁部貼 付→取状文	ロクロナデ		白線部灰化。	
61	灰部形	蓋	011A20	V				灰白	灰白	B	白・長・石 ・黒	ロクロナデ→縁部貼 付→取状文	ロクロナデ			
62	灰部形	蓋	011A20	V				灰黄	灰黄	B	白・長・石 ・黒	白線：カキメ→ロク ロナデ。胎：平行タ タキ	白線：カキメ →ロクロ ナデ。胎：青濁 灰アケ具			
63	灰部形	蓋	011B10	IV				灰白	灰白	B+	白・長・石 ・黒	平行タタキ	青濁灰アケ具		外面灰化。	
64	灰部形	蓋	010A21	IV				灰白	灰白	B	白・長・黒	平行タタキ	青濁灰アケ具		外面灰化。	
65	灰部形	蓋	010B16	V				黄灰	灰白	B	白・長	平行タタキ	青濁灰アケ具		外面灰化。	
66	灰部形	蓋	010B14	III				灰	灰白	B+	白・長・石 ・黒	平行タタキ→一部カ キメ	青濁灰アケ具		外面に黄濁灰片残留。外 面灰化。	
67	土部形	碗	010A15	V				黄緑	黄緑	緑灰	白・長	ロクロナデ→回転無 タタキ	ロクロナデ		胎土黄濁。	
68	土部形	碗	011B15	V		62	(17)	橙	橙	緑灰	白・長	ロクロナデ→回転無 タタキ	ロクロナデ		胎土黄濁。	
69	土部形	碗	011B10	V		60	(23)	橙	橙	中緑	白・長・石 ・黒	ロクロナデ→回転無 タタキ	ロクロナデ			
70	土部形	蓋	010B6	VI	178	(48)		暗黄緑	に赤い黄 緑	中緑	白・長・石 ・黒	ヨコハケメ	ヨコハケメ			
71	土部形	蓋	011A20	V				橙	橙	中緑	長・石・黒 ・赤	タテハケメ	ヨコハケメ			
72	土部形	蓋	011A20	IV				に赤い橙	橙	中緑	白・長・石 ・黒	タテハケメ	ヨコハケメ			
73	土部形	蓋	011B5	VI				に赤い橙	灰黄緑	中緑	白・長・石 ・黒	タテハケメ	ヨコハケメ		外面入付 着	
74	土部形	蓋	010A17	V				に赤い黄 緑	に赤い黄 緑	中緑	長・石・黒	平行タタキ	青濁灰アケ具			
75	土部形	蓋	010B11	V		84	(37)	暗黄緑	灰黄緑	中緑	長・黒	タテハケメ	ヨコハケメ			
76	土部形	蓋	010A22	V		90	(24)	に赤い黄 緑	に赤い黄 緑	中緑	長・石・黒	ヨコナデ。底面黄濁 灰	ハケメ			
77	土部形	蓋	011A20	V		54	(29)	に赤い黄 緑	に赤い黄 緑	中緑	白・長・石 ・黒	ナデ	ヨコハケメ			
78	笠山土 器		011A20	V		124	(35)	浅黄緑	に赤い黄 緑	中緑	長・石・黒	胎土赤黄緑。底面黄 濁灰	ヨコナデ			
79	土部形	小瓶	011B10	V	128		(28)	浅黄	暗赤子 →灰	緑灰	白・長・黒 ・赤	ロクロナデ			白線：ロクロ ナデ。胎：ヨ コナデ	
80	土部形	小瓶	010A16	VI				に赤い黄 緑	橙	緑灰	白	ロクロナデ→カキメ	カキメ			
81	土部形	蓋	010B6	VI	(220)		(36)	橙	橙	緑灰	白・長・黒	白線：ロクロナデ。 胎：カキメ	カキメ		外面入付 着	
82	珠洲	磁鉢	011A25	IV				暗赤子 →灰	灰	緑灰	海・白・黒 ・赤	ロクロナデ	ロクロナデ			
83	珠洲	蓋	010A16	III				灰白	灰白	中緑	海・白・黒	平行タタキ	黄アケ具		胎土は赤褐色陶質	
84	珠洲	蓋	011B10	III				灰	灰白	中緑	海・白・黒	平行タタキ	黄アケ具			
85	珠洲	蓋	010B10	III				灰白	灰	中緑	海・白・黒	平行タタキ	黄アケ具		内面入付 着	

## 観察表

報告番号	分類 種類 銘柄	出土地点	単位	口径 (mm)	底径 (mm)	器高 (mm)	色調		胎土	産人物	製作痕跡		使用痕跡	備考
							外面	内面			外面	内面		
86	珠肉 壺	O1081	Ⅱ				明オリーブ灰	明オリーブ灰	緑黄	白・黒	平行タタキ	襷アケ具		
87	瀬戸末 天目茶壺	不明	Ⅱ			(45)	にがみ陶	にがみ陶	緑黄		黒粒	黒粒		
西1	灰磁器 有白粉	西角地古窯跡	真鍮	124	76	54	青灰	青灰	A+	白・黄	ロクロナデ→回転ヘラ型リ→高合扇付	ロクロナデ	—	器底あり、外面体部へ口縁部まで。
西2	灰磁器 有白粉	西角地古窯跡	真鍮	103	66	39	青灰	青灰	A+	白・黄	ロクロナデ→回転ヘラ型リ→高合扇付	ロクロナデ	—	
西3	灰磁器 杯蓋	西角地古窯跡	真鍮	116		23	灰	灰	A+	白・黄	ロクロナデ→回転ヘラ型リ→口口閉り型→組み扇付	ロクロナデ	—	器入り径 24mm、器底径 30mm程度、外面口縁部まで。
西4	灰磁器 長頸壺	西角地古窯跡	真鍮	84	(93)		灰	灰	A+	白	ロクロナデ	ロクロナデ	—	大角形通身 (1979) 報告 No.14 と同一製法か、内面口縁部まで。
西5	灰磁器 有白粉	西角地古窯跡	真鍮	94	66	36	青灰	青灰	B+	白・黄	ロクロナデ→回転ヘラ型リ→高合扇付	ロクロナデ	—	外面のみ。
西6	灰磁器 有白粉	西角地古窯跡	真鍮	108	72	32	青灰	青灰	B+	白・黄	ロクロナデ→回転ヘラ型リ→高合扇付	ロクロナデ	—	
西7	灰磁器 杯蓋	西角地古窯跡	真鍮	116	26	19	灰	灰	B+	白・黄・青	ロクロナデ→回転ヘラ型リ→口口閉り型→組み扇付	ロクロナデ	—	器入り径 26mm、外面口縁部まで。
西8	灰磁器 壺	西角地古窯跡	真鍮	208		(97)	灰白	灰白	B+	白・黄	口縁：ロクロナデ、胴：平行タタキ	口縁：ロクロナデ、胴：青灰、高直了平具	—	
西9	灰磁器 有白粉	西角地古窯跡	真鍮	132	98	34	灰白	灰白	C+	白・黄	ロクロナデ→回転ヘラ型リ→高合扇付	ロクロナデ	—	器元不十分で、器→器へ、外面口縁部まで。
西10	灰磁器 無白粉	西角地古窯跡	真鍮	114	84	31	灰白	灰白	C+	白・黄	ロクロナデ→回転ヘラ型リ	ロクロナデ	—	器元不十分で、器→器へ、外面口縁部まで。
西11	灰磁器 杯蓋	西角地古窯跡	真鍮	120	24	22	灰白	灰白	C+	白・黄	ロクロナデ→回転ヘラ型リ→口口閉り型→組み扇付	ロクロナデ	—	器元不十分、器入り径 24mm、外面口縁部まで。
西12	灰磁器 壺	西角地古窯跡	真鍮	150	104	28	灰	灰	C+	白・黄	ロクロナデ→回転ヘラ型リ	ロクロナデ	—	器元不十分、内外面火穴すき込みあり。大角形通身 (1979) 報告 No.8 と同一製法か、外面口縁部まで。

## 土製品観察表

( ) 内数字は器存数。

報告番号	分類 種類 銘柄	出土地点	単位	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)	外径 (mm)	内径 (mm)	備考
88	土製品 筒付	O1082	VI	(41)	(42)	(19)	(25.5)		(28)	下腹は平化している。
89	土製品 筒付	O1A25	V	(49)	(18)	(45)	(20.3)	(59)	(21)	下腹は平化している。

## 鉄製品観察表

( ) 内数字は器存数。

報告番号	分類 種類 銘柄	出土地点	単位	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)	備考
90	鉄製品 釘	O11A20	V	(52)	9	9	(14.9)	角釘で、断面は欠損する。
91	鉄製品 刀子	O1081	V	(29)	7	4	(2.6)	刃部は欠損し、中実部分である。

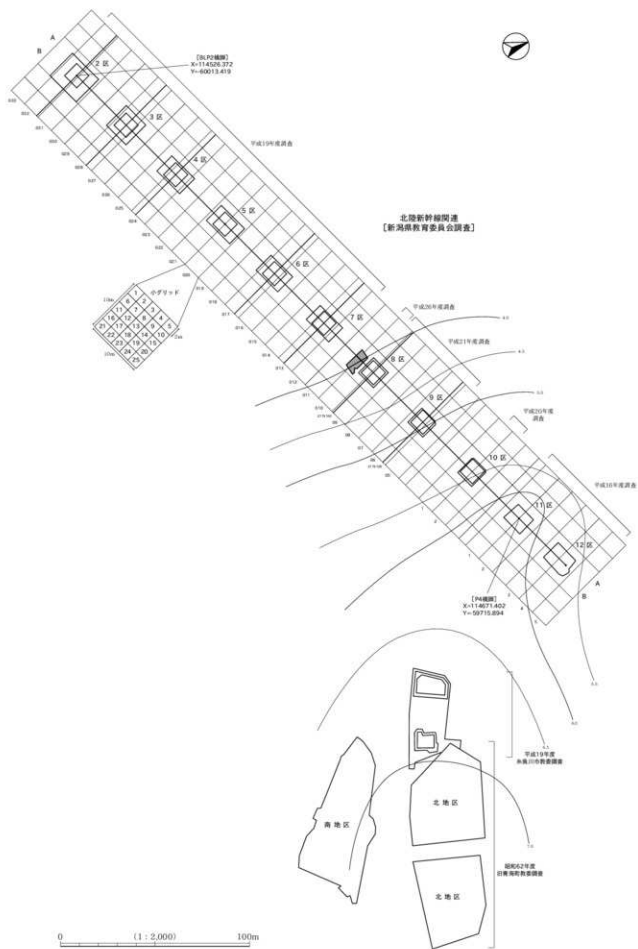
## 石器観察表

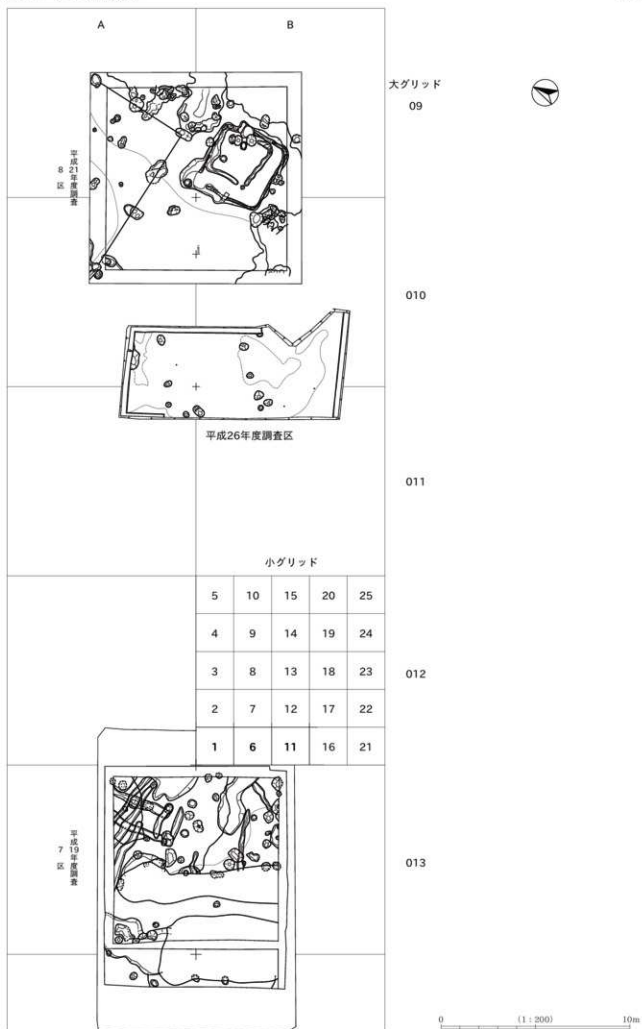
( ) 内数字は器存数。

報告番号	分類 種類 銘柄	出土地点	単位	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)	石質	備考
92	石器 磁石	O1081	V	(104)	89	36	(386.6)	凝灰岩 (凝灰)	4面 (正面、両側面・上面) 使用、下面・裏面欠損する。
93	石器 磁石	O1081	V	(104)	52	52	(313.0)	凝灰岩 (凝灰)	上面を磨き、5面使用、下面の一部利用。
94	石器 磁石	O1082	IV	(79)	42	(34)	(123.1)	凝灰岩 (凝灰)	3面 (正面、両側面) 使用、上面は欠損する。
95	石器 磁石	O1A25	IV	(27)	43	(5)	(7.6)	輝石粘土質	3面 (正面・両側面) 使用、上面は欠損する。岐阜県河原磁石。
96	石器 磁石	O1081	IV	127	97	31	580.3	ヒン岩	採集部を使用。
97	石器 磁石	O1081	IV	130	68	43	534.9	燧石	採集部を使用。
98	石器 フレーク	O1086	VI	72	20	81	140.1	黒色頁岩	いわゆる貝殻状片片である。
99	石器 フレーク	O1A25	VI	44	12	64	35.5	燧石	いわゆる貝殻状片片である。

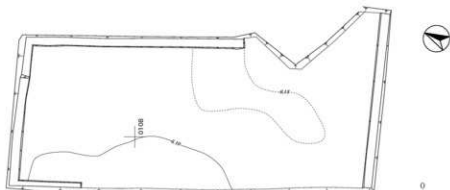
## 圖 版



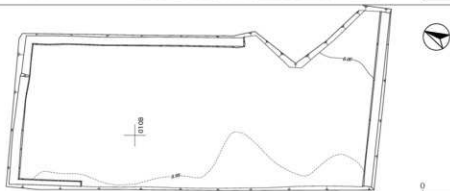




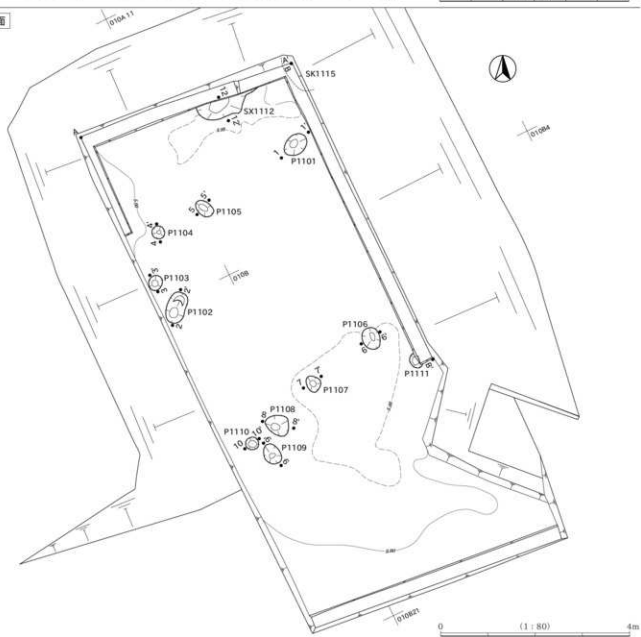
IV层上面



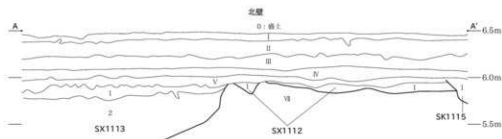
V层上面



VI层上面

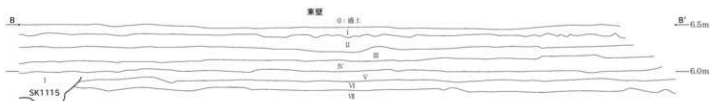






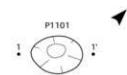
SK1113

- 1 におい黄褐色砂質シルト 炭化粒・土層が少量混入する (2層の汚れ)。  
2 におい黄褐色砂質シルト (洪水堆積層か)



SK1115

- 1 黒褐色粘質シルト 炭化粒・土層が少量混入する。下層は暗褐色粘質シルトになる。  
上面には鉄分が沈着し、棕色を呈する。V層中で掘り込み、V層に近接した塵土である。



P1101

- 1 黒褐色シルト 炭化粒を少量含む。



P1102

- 1 黒褐色シルト 炭化粒を少量含む。  
2 褐色シルト 炭化粒を少量含む。



P1103

- 1 灰黄褐色シルト 炭化粒をごく少量含む。



P1104

- 1 灰黄褐色シルト 炭化粒をごく少量含む。  
鉄分が沈着し、部分的に棕色を呈する。



P1105

- 1 灰黄褐色シルト 炭化粒を少量含む。



P1106

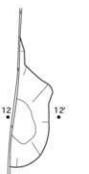
- 1 灰黄褐色シルト 炭化粒を少量含む。  
鉄分が沈着し、部分的に棕色を呈する。



P1107

- 1 灰黄褐色シルト 炭化粒を少量含む。

SK1112



SK1112

- 1 におい黄褐色砂質シルト 炭化粒をごく少量含む。  
底面は鉄分が沈着し、明褐色を呈する。



P1108

- 1 黒褐色シルト 炭化粒を少量含む。



P1109

- 1 黒褐色シルト 炭化粒を少量を含む。

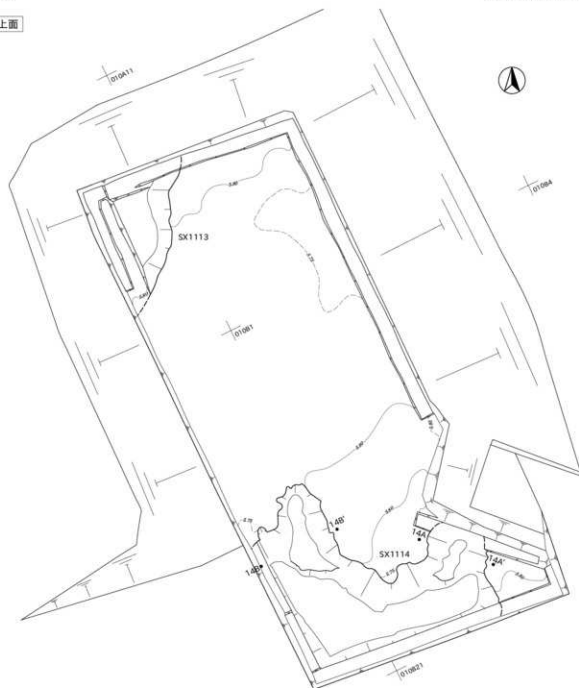


P1110

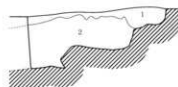
- 1 灰黄褐色シルト 炭化粒を少量含む。

0 (1/40) 2m

瓦層上面



14B SX1114 14B<sub>0.00m</sub>



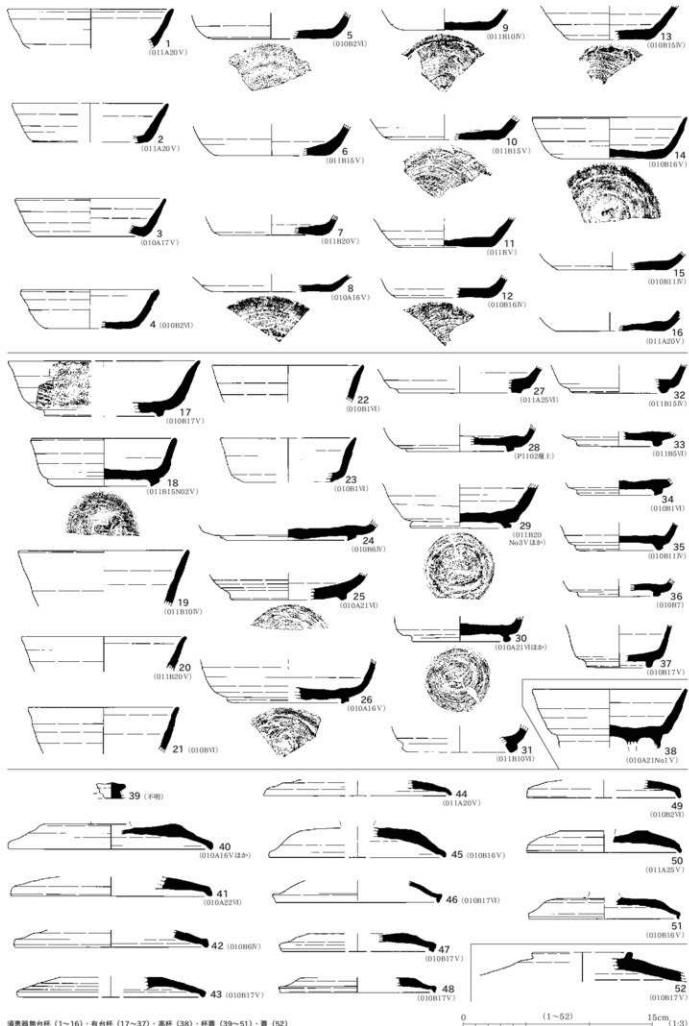
SX1114  
1 におい黄褐色シルト (洪水堆積層か)  
2 におい黄褐色砂質シルト (洪水堆積層か)

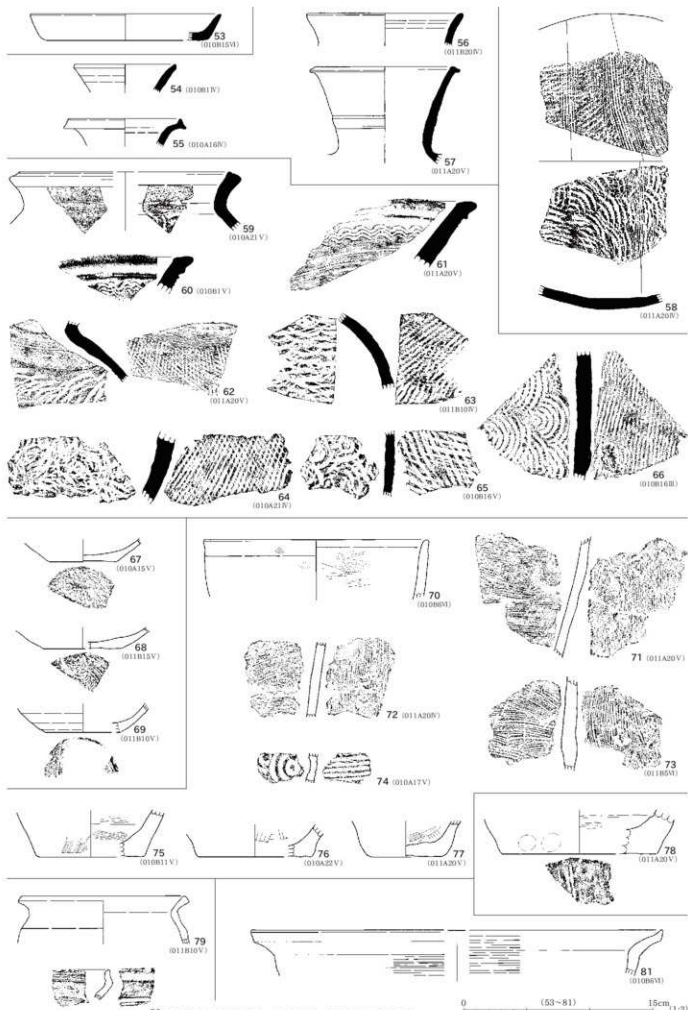
14A SX1114 14A<sub>0.00m</sub>



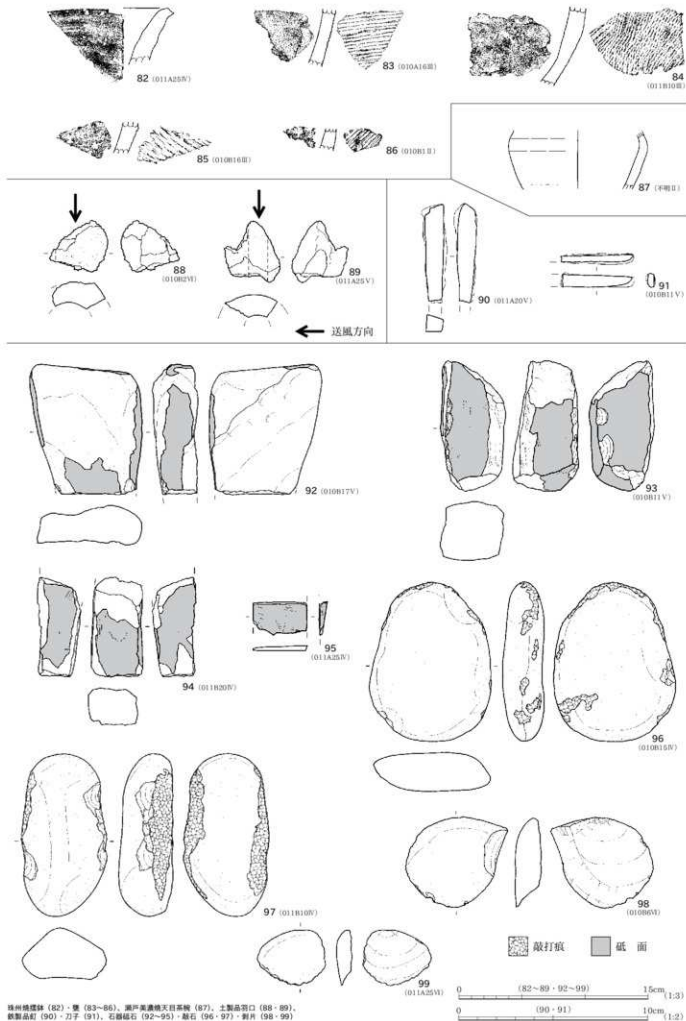
SX1114  
1 におい黄褐色砂質シルト (洪水堆積層か)





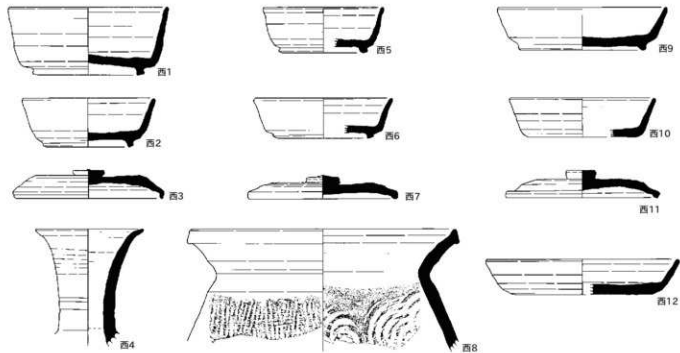


80 (010A16B) 須恵器類 (53)・壺 (54~57)・横瓶 (58)・壺 (59~66)。  
土師器類 (67~69)・壺 (70~77)・築込土器 (78)・小甕 (79・80)・甕 (81)



珠洲焼磁鉢 (82)・壺 (83~86)、瀬戸美濃焼天目茶碗 (87)、土製品筒口 (88・89)、  
鉄製品釘 (90)・刀子 (91)、石鏃磁石 (92~95)、磁石 (96・97)・射片 (98・99)

0 15cm (1:3)  
0 10cm (1:2)



須惠器有台杯 (西1・西2・西5・西9)・無台杯 (西9・西10)・杯蓋 (西3・西7・西11)・長頸壺 (西4)・甕 (西8)・盤 (西12)

0 (西1~西12) 15cm 1:3





遺跡遠景（南から） 矢印方向の北陸新幹線高架橋下が調査地点



調査区全景（北から） VI層上面の遺構配置





調査区近景 (南から)



調査区近景 (東から)



010A16 グリッド 北壁基本層序 (南から)



010A22 グリッド 東壁基本層序 (西から)



IV層上面 調査区全景 (南から)



V層上面 調査区全景 (北から)



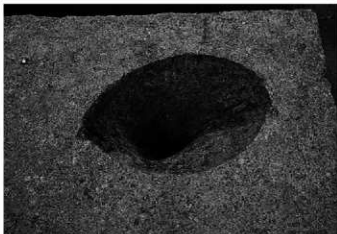
VI層上面 調査区全景 (南西から)



VI層上面 調査区全景 (北から)



P1101 土層断面(南東から)



P1101 完掘(南から)



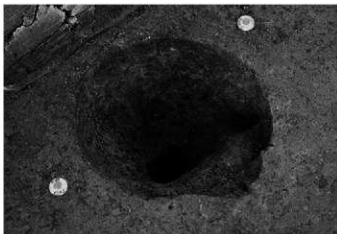
P1102 土層断面(東から)



P1102 完掘(東から)



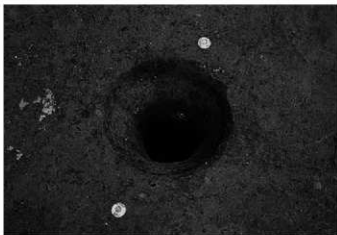
P1103 土層断面(東から)



P1103 完掘(東から)



P1104 土層断面(東から)



P1104 完掘(南から)



P1105 土層断面 (南東から)



P1105 完掘 (南東から)



P1106 土層断面 (南から)



P1106 完掘 (南から)



P1107 土層断面 (南東から)



P1107 完掘 (南から)



P1108 土層断面 (南から)



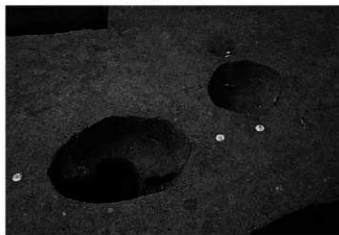
P1102 完掘 (東から)



P1109 土層断面(北東から)



P1110 土層断面(南東から)



P1109・P1110 完掘(東から)



SX1112 土層断面(西から)



SX1112 完掘(西から)



SX1113 土層断面(南から)



SX1113 完掘(北東から)



SX1114 土層断面 B-8' (南から)



SX1114 土層断面 A-A' (南から)



SX1114 完掘 (西から)



SK1115 土層断面 (西から)



須恵器高环 (No.38) V層内出土状況 (南から)



須恵器有台环 (No.29) V層内出土状況 (西から)



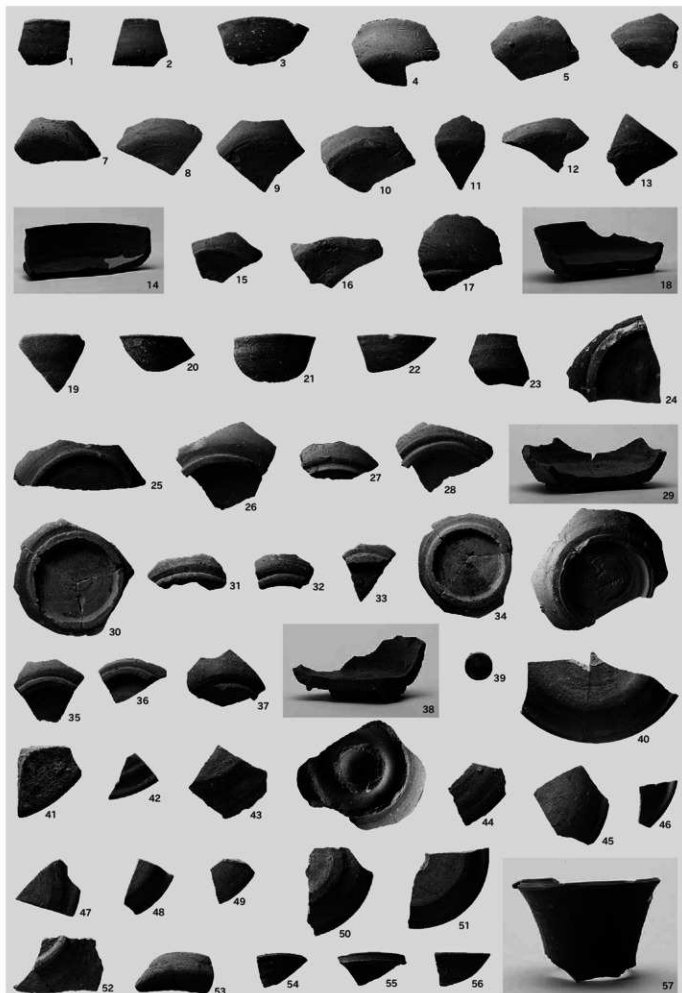
須恵器有台环 (No.18) V層内出土状況 (南から)



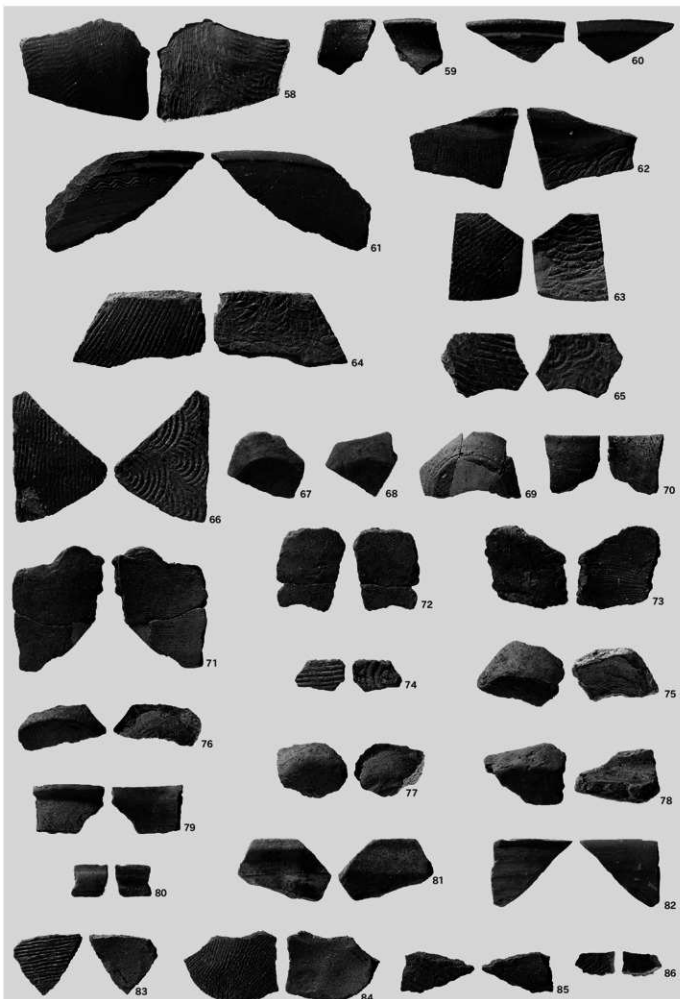
作業風景 (北から)



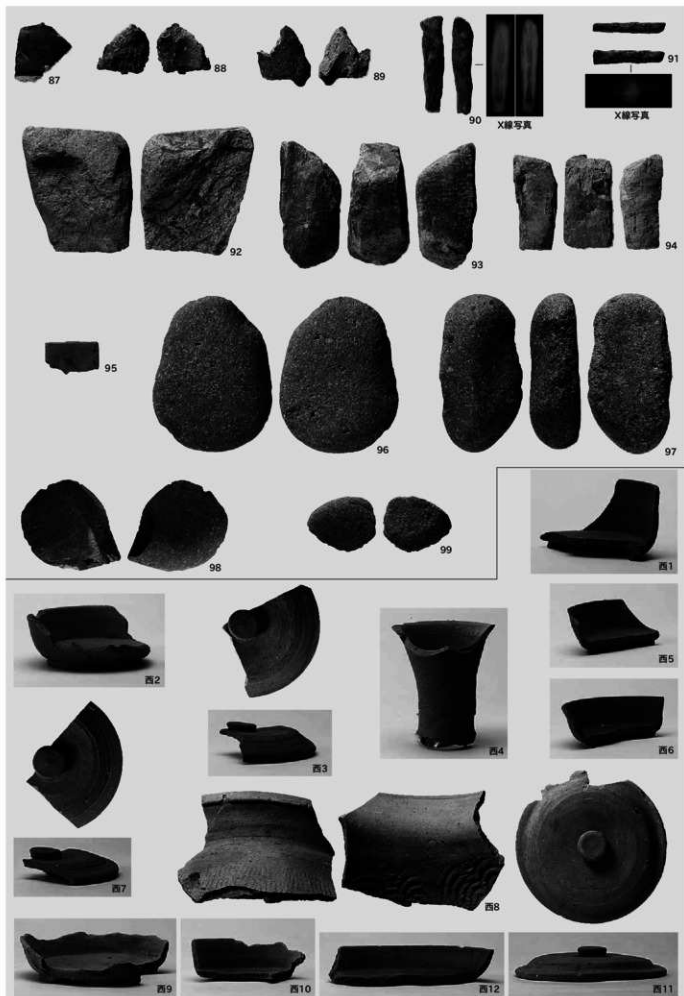
現地説明会 (南から)



須恵器製台杯 (1~16)・有台杯 (17~37)・高杯 (38)・杯蓋 (39~51)・蓋 (52)・蓋 (53)・蓋 (54~57)



須恵器横瓶 (58)・壺 (59~64)、土師器碗 (67~69)・壺 (70~77)、瀬磁土器 (78)・小壺 (79・80)・甕 (81)、珠州焼横鉢 (82)・壺 (83~86)



瀬戸美濃焼天目茶碗 (87)、土製品破口 (88・89)、軟製品釘 (90)・刀子 (91)、石線磁石 (92~95)、磁石 (96・97)・製片 (98・99)、  
西角地古窯跡須恵器有台鉢 (西1・西2・西5・西9)・無台鉢 (西9・西10)・秤量 (西3・西7・西11)・灰環器 (西4)・甕 (西8)・甕 (西12)

90・91 (1:2)  
その他 (1:3)



# 報告書抄録

ふりがな	すぎわかちいせきに							
書名	須沢角地遺跡Ⅱ							
副書名	北陸新幹線関係発掘調査報告書							
巻次	XXIV							
シリーズ名	新潟県埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第256集							
編著者名	高橋保雄（公益財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団）、齋藤紀行・石岡智武（パリノ・サーヴェイ株式会社）							
編集機関	公益財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団							
所在地	〒956-0845 新潟県新潟市秋葉区金津93番地1 TEL.0250(25)3981							
発行年月日	2014（平成26）年12月26日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	道跡番号	北緯 °	東経 °	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
須沢角地遺跡	新潟県糸魚川市須沢 字大坪2672番2ほか	15216	250	37° 01′ 52″	137° 49′ 39″	20140415～ 20140603	268	北陸新幹線建設の伴う 市道取付
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
須沢角地遺跡	集落	奈良～平安 時代	土坑1基、ピット11基、 性格不明遺構3基	土師器、須恵器、鉄製品（釘、刀子）、 石器（砥石）、土製品（羽口）			集落内の遺構の希薄な 部分と思われる。	
	散布地	中世		珠洲焼、瀬戸美濃焼、石器（砥石・ 砥石）			集落からやや離れた生 産域と思われる。	
	散布地	縄文時代		石器（剥片）				
要 約	<p>遺跡は、延川左岸の扇状地西端に立地し、古代の遺構検出面の標高は5.9mである。調査の結果、縄文時代、古代、中世の遺構・遺物を検出した。</p> <p>縄文時代は石器がごく少量出土した。遺構は検出されなかった。</p> <p>古代の遺構は土坑1基、ピット11基、性格不明遺構3基である。過去の調査区に照らし合わせれば、古代集落の範囲内の比較的遺構の希薄な部分を調査したものと考えられる。なお、性格不明遺構は検出面や覆土、形状から樹痕と考えられ、古代集落の成立以前の形成と判断できる。</p> <p>古代の遺物は、調査面積が狭い割には多く出土している。8世から10世紀ころまで認められるが、8世紀末葉から9世紀初頭葉が主体である。この時代の須恵器には、焼歪みの著しいものや溶着痕のあるものが認められ、胎土の内眼観察から多くは調査区の西500mに存在する西角地古窯跡と考えられた。両遺跡の須恵器の胎土分析を行った結果、多くの須恵器が西角地古窯跡から搬入されていることが明らかになった。</p> <p>本遺跡は、かつて北陸道「浪海駅」の有力な候補地とされたが、「駅の存在を裏付ける資料が存在せず、駅を支えた青海地域最大の古代集落」[加藤2011]と評価されている。本調査の結果もこの評価を超えるものではなかった。</p> <p>中世の遺物は、珠洲焼、瀬戸美濃焼、石器が散在に出土した。遺構は検出されなかった。周辺に水田が検出されていることから、集落から比較的離れた生産域と考えられる。</p>							

## 新潟県埋蔵文化財調査報告書 第256集

### 北陸新幹線関係発掘調査報告書XXIV

#### 須沢角地遺跡Ⅱ

2014（平成26）年12月15日印刷  
2014（平成26）年12月26日発行

編集・発行 新潟県教育委員会  
〒950-8570 新潟市中央区新光町4番地1  
電話 025(285)5511

公益財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団  
〒956-0845 新潟市秋葉区金津93番地1  
電話 0250(25)3981  
FAX 0250(25)3986

印刷・製本 株式会社ハイングラフ  
〒950-2022 新潟市西区小針1丁目11番8号  
電話 025(233)0321